慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	レーモン・ルーセル『新アフリカの印象』第二歌・解題 (2) : 〈とり違い〉のセリー
Sub Title	Raymond Roussel, Le chant II des Nouvelles impressions d'Afrique, la traduction et une interprétation (2) : la série «prendre A pour B»
Author	新島, 進(Niijima, Susumu)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2023
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.77 (2023. 10) ,p.69- 117
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20231031-0069

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

この著作物は著作権法によって保護されています／This content is protected by the Japanese Copyright Act

レーモン・ルーセル
『新アフリカの印象』第二歌・解題（2）

〈とり違い〉のセリー

新　島　　進

取り違え
読み方：とりちがえ
別表記：取り違い

（1）話の内容や意味などを誤解すること。
（2）自分のものではない物を間違って手にとること、特に生まれたばかりの赤ん坊を間違った母親が連れ帰ってしまうこと。一般に、出産が行われた病院側の手違いにより起こることが多い[1]。

レーモン・ルーセル『新アフリカの印象』第二歌の読解をひき続きおこなう。本稿では前号[2]で残しておいた〈とり違い〉の詩列（セリー）をとりあげる。これで第二歌すべての詩句を点検したことになる。

1）「実用日本語表現辞典」（https://www.weblio.jp/content/%E5%8F%96%E3%82%8A%E9%81%95%E3%81%88）、2023 年 8 月 15 日閲覧。
2）「レーモン・ルーセル『新アフリカの印象』第二歌・解題（1）」（『慶應義塾大学日吉紀要フランス語フランス文学』76 号、2023 年）。作品の概要、本プロジェクトの主旨についても同号を参照されたい。

〈とり違い〉のセリーの概略

まずはセリーがどのように展開しているのかを前号掲載の訳文とパート分けを基に復習しておく。**太字**が〈とり違い〉のセリーを含む 4b のパートとなっている。

11	((十字はさまざまな形をしているものだ！　星の集まりが	↓ 2a
12–29	［中略］	
30	しばしば、ガラス張りのドア越しに、ローストした肉の傍で[1]、	
31	十字に組まれるのが見える（((店主は	↓ 3c
32–34	((((4a　セリーなし))))	4a
35	人は、誰もが目ざとくも頭陀袋を首に掛け、	
36	本人はペしゃんこだと思っていても、望み通り膨れたポケットのなか、	
37	肩甲骨のうしろに、その人固有の短所を持っていることを知っており	
38	**((((さらに、人が彼のあら探しをしているあいだ、その男は、**	**↓ 4b**
39–42	(((((5a　セリーなし)))))	5a
43	**あちらのドアや、こちらの壁で聞き耳をたて**	
44–45	(((((5b　セリーなし)))))	5b
46	**丸裸にされた己の短所や、悪癖や、欲望を知るやいなや、**	
47	**自分の甘い目を通して、それらは小さくされる**	
48–88	(((((5c〈縮まるもの〉のセリー)))))	5c
89	**まるで、これまでにも魔法の力が一瞬の好機を選び、**	
90	**たびたび彼に、そうさせたことがあったかのように**	
91–506	**とり違いを。〈とり違い〉のセリー))))**	**↑ 4b**
507	挨拶につけ加える香炉のひと振りを探す一方	
508	自分に幸運が巡って来るようにと	
509–540	((((〈気まぐれな運命〉のセリー))))、	4c
541	その輪は休みなく、絶えず翼を回しているが、	
542	――臍の前の、間抜けな男の帽子のように、――	
543	どんな主もへつらい、耳を貸すものだ――帽子を持ちあげるものだ	
544–601	客がなにを言い張っても――〈矛盾した考え〉のセリー)))	↑ 3c
602	カット係が、カチャカチャいわせながら研ぐ二本のナイフが))、	↑ 2a

はじめに確認しておきたいのは〈とり違い〉のセリーが有する並外れた分量だ。二重括弧 2a で展開する〈十字〉のセリー掉尾では、最後の 5 例目において、レストランで肉を切るときに給仕がクロスさせるナイフが想起され

る（30–31 行）。そこから「店主は」ではじまる三重括弧 3c が開かれ、これが閉じられるのは 500 行以上も先、第二歌も最終盤の 601 行においてである（親括弧の 2a は次の 602 行で閉じられる。なお、この歌の最終行は 611 行）。第二歌は本文と脚註の詩句を合わせて全 644 行であるため、全 570 行＋半句からなる 3c は第二歌の約九割を占める。この 3c は 544 行から 601 行にかけて〈矛盾した考え〉のセリーを展開するが、その前に 4a, 4b, 4c という三つの四重括弧を開く。このうち 4a は 3 行の挿入句（32–34 行）であり、一方、4b は〈とり違い〉のセリー（91–506 行）を、4c は〈気まぐれな運命〉のセリー（509–540 行）を展開する。4b は 469 行からなり、〈とり違い〉のセリーを展開する前に 5a, 5b, 5c という三つの五重括弧を開く。そのうち 5a（39–42 行）と 5b（44–45 行）はやはり数行の挿入句だが、5c は〈縮まるもの〉のセリー（48–88 行）を構成する。まとめるなら第二歌全 644 行中、三重括弧 3c は 570 行、その内部にある四重括弧 4b は 469 行、そこで展開する〈とり違い〉のセリーが約 416 行で、このセリーだけで第二歌全体の六割以上（約 64.6 パーセント）、全 1277 行（ないしは 1276 行）[3] からなる『新アフリカの印象』全体の約三割（約 32.6 パーセント）を占める。初版のルメール版では 65 ページから 137 ページまで延々と続く[4]。例の数も 207 例と桁外れであり、『新アフリカの印象』最大のセリーであることはもちろん、二番目に大きい第一歌の〈自問〉のセリー（約 112 行、54 例）と比べても約四倍もの規模があり、とにかく群を抜いて長い。これは〈とり違い〉こそが『新アフリカの印象』の、ひいてはルーセルの詩学の本質をなすことを示すだろう。なお、〈とり違い〉のセリー内部でさらに多重括弧が開いたり――四重括弧のなかで展開するため、かりに開いたなら五重だが――脚註に

3）第一歌につく註のひとつ（la gloire a l'horreur du teint frais.）は本文の詩句（le jeune auteur[1]）と組み合わせることでアレクサンドランを形成する。よってこれを一行と数えれば 1226 行、別の行とみなせば 1277 行。なお、ルーセルの誕生日は 18[77]年[1]月[2]0 日であり、〈とり違い〉のセリーは 207 例からなる。

4）ただし前号で説明したとおり、初版であるルメール版の『新アフリカの印象』では、詩句は四ページ毎にしか印字されない。

詩句が飛んだりすることはない。また、このセリーに配されるゾーの挿画は計 17 葉で、本稿では前回同様、紀要誌掲載という制約からルメール版の配置を踏襲せず、キャプションをつけ、試訳のあとにまとめて掲載する。

セリーの口火となるキューまでの流れとセリーの形式を見る。4b（上の太字部分）の意味内容をまとめるならば、このレストランの店主は、人が彼の悪口を言っていると、その様子を盗み見たり、盗み聞きしたりするのだが、それは心のなかで矮小化される、つまり大きな欠点も小さくされる――ここから〈縮まるもの〉のセリーが展開する。さらに魔法の力（un ensorcellement）の作用で、この店主はそれと似たようなとり違いを以前にもたびたびしたことがあったと脱線し、これがキューとなり、彼がしたとり違いが 207 例列挙されるのである。

ソシュールの用語を使えば、このセリーはたったひとつのサンタグム「A と B をとり違える（« prendre A pour B »）」からなり、パラディグムとして 207 からなる A と B の組み合わせを持つ。一例目はベンジャミン・フランクリンがおこなった凧揚げ実験の凧の糸（A）と裁縫の糸（B）をとり違えた例であり、二例目は花火の三連星（A）と士官がつける腕章の三つ星（B）をとり違えた――そんなものをとり違えるかという疑問はひとまず措くとして――例である。セリー冒頭の原文は、

> A prendre : — l’appareil qui, trouvé par Franklin,
> Sans danger dans un puits fait se perdre la foudre
> Pour un fil gris passé dans une aiguille à coudre ;
> — Pour ceux dont s’orne un bras arrivé d’officier
> Au ciel trois jumeaux blancs astres d’artificier ;[5)]

となっており、以後、例はすべて « A pour B »（一例目のパターン）ないしは « pour B A »（二例目のパターン）のどちらかの形式をとる[6)]。ひとつの例

5）Raymond Roussel, *Nouvelles impressions d’Afrique*, Lemerre, 1932, p. 65.

6）本稿の試訳では « A pour B » の場合は「A を B と」、« pour B A » の場合は「B

の分量は二行から三行で、次の例との切れ目には；―― が配される。上では一例目がちょうど行末で終わってるが、行の途中で区切られるケースがむしろ多い。詩句はもちろんアレクサンドランで綴られ、押韻もおこなわれる。

細部に立ち入るが、このパターンは五箇所において崩れている。11 番目の例と 12 番目のあいだには ―― の代わりに「そして（et）」が置かれ（以後、各例は 1–207 の通し番号のみで示す）、155 と 156、171 と 172、172 と 173 のあいだには ―― が入らず、188 と 189 のあいだは ―― の代わりに「そしてのちに（et tard）」が繋ぎの語となっている。原則、一例目（凧糸／裁縫の糸）と二例目（腕章の星／花火の星）がそうであるように、例と例のあいだに意味的な連続性は見いだせない。しかし 11 と 12 はともに「目玉焼き」が問題となり、155 と 156 では同じ「手」が謳われ、171–172–173 は同じ「黒人」に関する連作であるため、このような措置がとられていると思われる。188 と 189 については、188 が「黄昏どき」、189 の調理人がポム・スフレを膨らまし損なったのが夜ということで、つまりこの二例には時間的な連続性があるために ―― が挿入されていないとも解釈できるが、11 と 12 のあいだの「そして」も含め、アレクサンドランを維持するために「そしてのちに」が埋め草的に入れられた可能性もあるだろう。いずれの場合もこの五箇所で ―― が入っていないのは、ルーセルや印刷所の過失による抜けではなく、意図的なものと考えられる。

例の内容に入ろう。まず、このセリーのとり違いはすべて視覚の錯誤に因るものである。ルーセルが『新アフリカの印象』を「要するにそれは、私の詩『眺め』の正確なやり直しであった」[7] とする意味はここにある。フーコーは「第三の展示平面（207 品目）――寸法の異なる品物のあいだ（針と避雷針、目玉焼と黄疸にかかった聖職者の剃髪した頭のあいだ）には、魔法にかけられた眼なら欺かれることがあるような形の類似が存在する。ジャ

と A を」と訳し分けている。

7）レーモン・ルーセル「いかにして私はある種の本を書いたか」、ミシェル・レリス『レーモン・ルーセル――無垢な人』岡谷公二訳（ペヨトル工房、1991 年）所収、145 ページ。

ン・フェリーは、しばしば非常に謎めいた、この厖大な系列を見事に解明している」(傍点筆者)[8] とし、そのフェリーはこのセリーを「A と B をとり違えてはいけない（il ne faut pas prendre A pour B)」と読むよう忠告する[9]。それに倣えばこのセリーの教訓は「形状が似ているからといって寸法の異なる A と B をとり違えてはいけない」というただそれだけのことであり、あるいはルーセル作品が、ロベール・ド・モンテスキューいうところの「事実の方程式」[10] だとしたら、詩人は A と B にさまざまな項を代入することでこの式を 207 通りで解いているのである。先に見たように、そもそも〈とり違い〉のセリーは「大きなものが小さくされる」という〈縮まるもの〉のセリーから派生していた。その錯誤を視覚情報に限り、より汎用化したのが〈とり違い〉ということになろう。

そして「とり違えてはいけない」207 の例はこの店主／詩人でなければ到底とり違えるはずもないものばかりだ。むしろ詩作の立場からは、寸法の異なる A と B をむりやり類似させているというほうが正しいだろう。つまり〈手法〉とはまた別の文学的制約がこのセリーを生み出しているのだ。ともあれ、こうして本来は関連性を持たない二つの物が類似した形状をしているという気づきと、その類似の整合性が詩句の面白さを生む。さらにルーセルはそれをアレクサンドランという箱に押しこめる。『新アフリカの印象』全四歌はたった 1276-7 行しかないが、通常の詩句に比して読解に多大な時間を要するのは、その入れ子構造もあれ、各詩句が、言語でできたある種の精巧なパズルであるからだ。ルーセルはアレクサンドランという制約のもと、とり違いという「事実の方程式」を解いていく。読者はその言語パズルを解いていく。フーコーもいうように、フェリーの助けがなければ未だ解明に至っていないであろう詩句、方程式も少なくないはずだ。以下、こうした特

8）ミシェル・フーコー『レーモン・ルーセル』豊崎光一訳（法政大学出版局、1975 年)、197 ページ。

9）Jean Ferry, *Une étude sur Raymond Roussel*, Arcanes, 1953, p. 66.

10）レーモン・ルーセル「いかにして私はある種の本を書いたか」、同上、129 ページ。

性をとりわけ顕著に示す、つまりルーセル的だと思われるとり違いの例をいくつか選んで解説を試みる。まずはフーコーも挙げている、そして筆者も傑作と唸った 11 から。

……――皿にぽつりと除けられた、真ん中に塩が
たっぷりかかった目玉焼きと、黄疸の出ている
年老いた神父が典礼でさげた頭を。……

A は年老いた神父の頭頂部、B は目玉焼き。「神父」は教会でおこなわれた「典礼」で「頭をさげた」ので頭頂部がよく見え、聖職にあるので剃髪をしている、つまり円形。また、この神父はおそらく肝臓が悪く「黄疸が出ている」のでその頭頂部は黄色い。さらに「年老い」ているので剃りあげた残りの髪は白く、黄色い円形部には白髪がポツポツ出ていることだろう。ならばこの神父の頭頂部は確かに、寸法は異なるものの、塩粒がついた目玉焼きに類似する、いや酷似する？　年老いた神父の頭頂部と目玉焼きが物としていかにかけ離れていようと、そのイメージの接近は少なくとも確固たる論理に基づいておこなわれている。加えて、これほどの多様なイメージと精緻な論理が三行未満の詩句に詰めこまれている。だが問題は、いったい年老いた神父の頭頂部と目玉焼きを誰がとり違えるのだろうかということだ。これだけの趣向を凝らしながら、この詩句が発するのはこの二つをとり違えてはいけないという無意味なメッセージのみである。なお、剃髪（tonsure）はルーセルが――なぜか――好んだ語彙で、若い頃にこの語をタイトルに持つ詩篇も書いている[11)]。

この例はまた、〈とり違い〉のセリーに特徴的な要素を複数備えている。ひとつは、このセリーでは「(人、動物の）身体の一部と物」とのとり違いがひじょうに多いということだ（11, 32, 34, 62, 79, 89, 100, 110, 113, 116, 120, 125, 129, 140, 143, 155, 156, 160, 171, 172, 173, 192, 197)。ないしは

11）Raymond Roussel, *La Tonsure*, in Raymond Roussel, *Œuvres III La Seine, La Tonsure*, Fayard, 1994.

「身体の一部とほかの身体の一部」というケースもある（11, 94, 98, 131, 142, 153, 181, 195）。語彙面でいうと「目玉焼き」についてはほかにもいくつかの料理、食材が登場するが、「卵」に絞ると 12, 44, 64, 71, 137, 140 でも明示的に言及される。『アフリカの印象』におけるバルベの挿話のほか、ルーセルが〈手法〉作品で卵やその殻を何度も問題にしていることを考えると、この頻度には注意を惹かれる。また、この例の神父のほかにも、教皇をはじめとする聖職者は〈とり違い〉のセリーにやはり複数回登場し、さらには教会や聖体拝領などカトリック信仰全般に関わる事象も少なくない（11, 21, 44, 45, 47, 50, 85, 97, 119, 137, 162, 185, 190, 205）。そのうちのいくつかは世俗のものととり違いがおこなわれる。『額の星』の教皇ユリウスほかこうした語彙が〈手法〉作品にも目立つことを思い出すと、これもまた示唆的な傾向である。

この例では「白」と「黄」がとり違いを誘発する要素としてあるが、ほかにも色が重要な役割を果たす例には事欠かない。〈とり違い〉のセリーで圧倒的に多いのはまさに「白」への言及、ないしはそのイメージであり（11, 45, 51, 67, 79, 82, 107, 115, 119, 123, 132, 137, 138, 140, 141, 156, 169, 175, 182, 185, 190, 191, 192, 195, 196）、「黒」と組み合わされることもある。ポー、マラルメと続く、書くこと／白黒の幻想も想起されるが、短篇「黒人たちのあいだで」（1900 年頃に書かれ、生前は未発表）や『アフリカの印象』（1910 年）の作者であり、またチェスに興じたルーセルにとって白黒はそもそも特権的な色でもある。「黒人たちのあいだで」で用いられた〈手法〉[12] では「黒人」、「チョーク」が問題となるが、〈とり違い〉のセリーにおいても「チョーク」は 3, 26, 51 に、「黒人」は 143, 171, 172, 173 に登場する。

12）この短篇は「古いビリヤード台のクッションに書かれた白墨の文字（Les lettres du blanc sur les bandes du vieux billard）」という句ではじまり、「年老いた盗賊の一味についての白人の手紙（LES... LETTRES... DU... BLANC... SUR... LES... BANDES... DU... VIEUX... PILLARD）」という句で終わる。Raymond Roussel, *Parmi les Noirs*, in *Comment j'ai écrit certains de mes livres*, Pauvert, 1963, p. 163 et 170.『アフリカの印象』はこの短篇をベースに書かれている。

……――犬が近くで
触れているために生温かい、主のいない首輪を引きずる綱を、
輪っかのついた日傘の紐と……

少し戻って5例目。Aは犬の首輪とリード。Bは、リング状の留め具がついた日傘の紐。「主のいない首輪」なので犬から首輪は外れており、それにリードが付随している。これは確かに、傘を括る紐と、それについた留め具のリングに似る。また日傘であるため日を浴びて熱くなっているはずで、よって首輪のほうも「犬が近くで触れているために生温かい」。ここでも精緻なロジックが働いているのがわかる。〈とり違い〉のセリー全般にA、Bの形状に注目すると棒状のものが圧倒的に多いが（やはりルーセル的な語彙であるビリヤードのキュー、敷石を埋めこむ突き棒、矢、煙草、蠟燭、ステッキ、ピン、針など)、輪やリングも少なくない（5, 41, 56, 68, 102, 122, 125, 134, 148, 176)。このうち41は絞首台の輪縄であり、さらに絞首は56, 190においても言及され、セリーに不穏な空気を漂わせている。動物も事欠かないが、犬に限れば5, 73, 136, 146, 197に登場する。ルーセル母子は小型犬を愛好していた。

……――近くに有気記号がある、
頂点を下にした二つの山型と、
廊下の奥にある戸の印を……

31例目。Aは「WC」の文字、Bは「VV'」という記号。これはもはや頓知である。フェリーの答え合わせがなければ、少なくとも筆者には永遠に解けなかったであろう。洋の東西を問わず「廊下の奥にある」のは御不浄であり、その戸には「WC」の文字がプレートに刻まれている。一方、「頂点を下にした二つの山型」を図にすれば「VV」であり、これは「W」に見える。そもそもフランス語ではWのことを「二つのV（ドゥブル・ヴェ）」と呼称する。そして「有気記号」とは古代ギリシャ語で用いられる記号であり、「ギリシア語には

母音が有気音であることを示すhに当たる文字がないので、その代わりに（‘）の記号を用いてこれを示す」[13]。この記号（‘）は形状がアルファベットのCに似ているため、確かにそれがVVの近くにあればwater closetの略号ととり違える……かもしれない。

記号や文字が〈とり違い〉をひき起こしている例はほかにも10, 26, 54, 60, 130, 157, 162, 164, 172, 186, 198に見られ、このうち10は「16分休符」、54は「シャープ記号」、186は「フェルマータ記号」といった音楽記号――123では五線譜と五本の傘――がとり違えられている。ルーセルと音楽との関係からすれば当然、楽器の登場回数も多い（13, 20, 43, 47, 48, 60, 168, 199）。記号、文字に戻ると、26と164はアルファベットのO、157と162は子どもの習字が問題になっており、それぞれ発想が類似している。

ルーセルのスカトロジーとしてトイレやトイレットペーパーは、前号で見たほかのセリーにも散見されたが、〈とり違い〉のセリーでは139, 140, 167, 184においてずばり「糞」が想起されている。

――咳をしている人が、喉のため、医者に見せるものと、
鍾乳石がぽつりとついた、落日に赤く染まる
洞窟の半弧を……

100例目。Aは洞窟の天井の半弧。Bは人の喉。これも身体の一部と物とがとり違えられている典型例。洞窟、喉ともにアーチ型をしており、さらに「咳をしている人」の喉は赤く、垂れさがっている口蓋垂はいつもより腫れて肥大化しているだろうから「落日に赤く染まる、鍾乳石がぽつりとついた」洞窟の天井とのとり違いが成立する。鍾乳石とは「鍾乳洞の天井からつらら状に下がった、白色や灰色の沈殿物」[14]。ここでは「赤」が重要な役割

13）田中美知太郎、松平千秋『ギリシア語入門　改訂版』（岩波書店、2012年）、4ページ。

14）デジタル大辞泉「鍾乳石」https://kotobank.jp/word/%E9%8D%BE%E4%B9%B3%E7%9F%B3-79670（2023年8月15日閲覧）

を果たしているが、17, 21, 36, 44, 75, 100, 101, 111, 121, 129, 147, 170, 193 でもこの色がとり違いの鍵になり、なかでも 75 は鼻血／経血、101 は喀血／血の海と、血が詩句を彩っている。『ロクス・ソルス』（1914 年）のデュル＝セルール女王は生理不順に悩み、エスルフリダは赤色恐怖症だった。

……――なんとおっしゃいましたか
のあとに適した仕草と、前を歩く黒い狆が
飼い主に見せるものを……

136 例目。A、B とも首を傾げる仕草。狆、つまり小型犬の散歩中、先に歩いている犬が振り向いて主人を見る動作は、人が言葉を聞き返すのに「適した仕草」に似る。シンプルなとり違いだが、先述のとおり、小型犬を愛好していたルーセル自身の暮らしと、犬のそぶりが目に浮かぶような詩句。

……――パン屑で離された二本の歯と、
親指を暇にしてクルトンを拾う、手袋をした
召使いの二本の白い指を……

142 例目。A はクルトンをつまんでいる二本の指、B はパン屑が挟まっている二本の歯。召使いは白い手袋をしており、おそらくテーブルの片づけをしている最中に、落ちていたクルトンを拾ったのだが、「親指を暇にして」いるということは、なぜか人差し指と中指を用いてつまんだということになる。よってクルトンを挟んでいるその白い二本の指は、パン屑が挟まった二本の白い歯ととり違えられる可能性（？）が高い。ここも逆に、歯と類似させるために親指を避け、人差し指と中指を使わせたのであろう。やはり身体の一部とほかの身体の一部がとり違えられており、白がその類似を補強している。同様にこの例では「二」が問題になっている。「二（deux）」は『ロクス・ソルス』における頻出語であり、〈とり違い〉のセリーにおいても 22, 67, 113, 114, 125, 127, 143, 150, 155, 176, 181, 201 において「二」ない

しは「対」のものが確認できる。当然ながらこれは、とり違いのＡとＢのペア、さらには韻を踏む二語を二重化している。

『アフリカの印象』でサーカス芸大会を、『ロクス・ソルス』でクロノメーターを複数備えた空飛ぶ撞槌を描いたルーセルであれば、ほかにも以下の事物のとり違いに注意を惹かれる。

スペクタクル――花火（2）、サーカス（16, 43, 55, 176, 179）、手品（68, 80, 150）、スパンコール（187）。

計器――温度計（4）、時計（57, 134, 169, 177）、パルスメーター（57）、コンパス／方位磁石（106, 173）、コンパス／製図用（177）、カンピロメートル（178）、晴雨計（180）、メトロノーム（197）。

ゲーム、遊び――コマ（35）、トランプ（36, 111, 203）、射的（64）、ルーレット（81）、キーユ（82）、チェス（82, 158）、ドミノ（105, 203）、トノー（110, 122）、目隠し鬼（118）、グラース（125）、輪回し（134）、ビリヤード（139, 196）、玉投げ（161）、チェッカー（182）、ソリティア（184）。

ほかに登場頻度が高いと思われるのは衣服やアクセサリー、装飾品、とりわけ『アフリカの印象』におけるナイルの挿話でも小道具となる手袋（13, 21, 58, 142, 156, 168, 191）と帽子（23, 30, 119, 137, 156, 174）であり、また、各種の書状、手紙、封筒、封書（29, 46, 49, 70, 111, 164, 189, 198）への偏愛も顕著である。さらに自作への自己言及や――『ロクス・ソルス』（8, 55, 70）、『アフリカの印象』（147）、ルーセルが愛好した文学作品への目配せ――ユゴー（33, 85）、ヴェルヌ（35, 206）、ペロー（72）、ラ・フォンテーヌ（110, 187）もひき続きおこなわれている。そして、葬儀や喪に関する語、事象への言及（29, 46, 49, 95, 159）は、『新アフリカの印象』刊行の翌年に――執筆は 1928 年に終えているが――ルーセルが死去することを暗示するだろうか。

『新アフリカの印象』全セリーを対象としたより体系的な語彙の点検作業は別の機会に譲るとして[15]、ひとまずここまでを総括すると、〈とり違い〉のセリーを構成する語にはルーセルがそれまで好んできた、この詩人に特有の語がやはり目立つということであり、つまりは〈手法〉作品と同一の語彙使用傾向が見られるということだ。そもそもAとBのイメージをとり違えるとは文学的営為においてなにを意味するのか？　少なくともいえるのは視覚的なとり違い、錯誤は比喩を生む原動力であり、つまり詩の生成における原初の体験だということであろう。そして韻――日常言語であれば地口――もまたとり違いの産物である。ならば拡大された韻である〈手法〉も当然、二つのフレーズ、AとBのとり違いから生じる。日常の言語交換で音が似ているからといって「婚約者のいるお嬢さん（demoiselle à prétendants)」と「歯でできた傭兵の突き棒（demoiselle à reître en dents)」とをとり違えてはいけない。だが、詩人はこれをとり違えることで『ロクス・ソルス』第二章の空飛ぶ撞槌を想起する。ルーセルは『新アフリカの印象』を〈手法〉とは無縁の作品だと断じた[16]。確かにこの詩篇では〈手法〉は用いられてはいまい。だが、とり違い自体が押韻に次ぐ制約となっており、その解決として詩句が量産されている。ならば『新アフリカの印象』は〈手法〉作品よりもより根源的な〈手法〉作品とみなすことができよう。そして『新アフリカの印象』が『眺め』の「正確なやり直し」であるならば、この最後の詩篇においておこなわれたのは、〈手法〉作品以前の韻文による描写作品と〈手法〉による散文作品との綜合であり、とり違いという詩的な体験こそがそれを可能にしたということがひとまずはいえるだろう。

ルーセルはレリスに対し、自分は多くの旅をしたが、その経験を作品に盛

15）フェリーも〈とり違い〉のセリーについて体系的な分類を試みたが、「分類を逃れる語がまだおよそ225語残っている」と諦めの言葉を発して完成を見送っている。Jean Ferry, *Op.,Cit.*, p. 121.

16）「私の詩の著作、『代役』、『眺め』、『新アフリカの印象』が、この方法［＝〈手法〉］と全く無関係なのは言うまでもない」レーモン・ルーセル「いかにして私はある種の本を書いたか」、同上、133ページ。

りこんだことはなかったと語り、「私にあって、想像力がすべてである（Chez moi, l'imagination est tout）」[17] と付言した。これはルーセルが現実から創作の素材を汲んでいないこと、また、この詩人の現実忌避の態度を示す発言としてたびたび引用される。だが、〈とり違い〉のセリー、そしてそれを準備した初期の描写作品を考えるならば、この言にはもうひとつの意味を見いだせよう。この imagination（想像力）は文字通り、image（像）を想う力であり、彼にあっては「イメージの言語化」がすべてなのではないだろうか。そしてそのイメージの出所は〈手法〉作品であれば言語のズレであり、『新アフリカの印象』であればセリーを生むキューの制約ということになる [18]。

このように、とり違いとはルーセルという詩人を理解するための根源的な問いであり、差異をその原理とする言語体系へのそれでもあるだろう。検証をさらに押し進めるためにも、まずは〈とり違い〉のセリーを精緻に読解する必要がある。

セリー４〈とり違い〉のセリー

前号に倣って詩句の解題をおこなう。店主がとり違えたことのあるＡとＢのペア――ないしは、一般的にはとり違えてはいけないＡとＢのペア――を明示し、必要に応じて説明をつけ加えた。前回同様、フェリーの研究 [19] なしにこの解題はなしえなかったが、とりわけフェリーの解釈に拠った箇所には（F）の記号をつけてそれを示した。そのほかの情報源は基本的に平凡社百科事典、Grand dictionnaire universel du XIX^{e} siècle をはじめとする事典類、そして辞書 Littré である。既訳も随時参照した [20]。

17）レーモン・ルーセル、同上、136 ページ。

18）描写作品のおけるイメージの源泉についてはより複雑な議論が必要であるが、おそらくはルーセルが有していたとされる、病跡学的にも興味深い、類い希なイメージの記憶力が問題になるだろう。

19）Jean Ferry, *Op.,Cit.*

20）Raymond Roussel, *New Impressions of Africa*, Translated by Mark Ford, Princeton University Press, 2012.,「レイモン・ルッセル著『新アフリカの印

1. A. 凧の糸、B. 裁縫の糸。ベンジャミン・フランクリンは雷の正体が電気であることを証明するため、1752 年、凧をあげて実験をおこなった。「井戸」は、雷からの電気を蓄えるため、凧から伸びる糸の先に設置されたライデン瓶のこと。

2. A. 三連星の花火。B. 階級を示す三つの星が入った腕章。

3. A. チョークで白線が引かれた黒板。B. 白線の入った聖職者の胸飾り。「涎かけ」は聖職者の胸飾り（rabat）のことで、中央に白い縦線が入っている。

4. A. 温度計の管と水銀溜め。B. 丸い頭のついたピン。

5. A. 犬の首輪とリード。B. 輪っかのついた日傘の紐。上述。

6. A. 螺旋式シャワー。B. 巻きばね。螺旋式シャワーは、水を噴射する管が、全身をとり囲むように螺旋形に配されているシャワー装置（F)。B は「うぶ」なのでまだ新品であり、ばねがきれいな螺旋形をしている。

7. A. 蠟燭消しと、その隙間から見える蠟燭の焦げた芯。B. 鉛筆削りと、その隙間から見える鉛筆の芯。ダンスカードは、踊る相手の名を記しておくノート。そこから紐が伸びており、先に鉛筆がついている。その鉛筆が白いのは芯のことではなく木が白く塗られているということ（F)、そうでないと蠟燭とのとり違いが起こらない。

8. A.『ロクス・ソルス』第二章、歯でできたモザイク画に描かれた、アーグの夢に出てくる水球（F)。B. カナリアの水飲み場。A はフェリーによる読解で、この解釈に至るのに十年間を要したというが、その執念がなければこの句の意味は未だに不明だったろう。

9. A. 回っている風車。B. 水面から出て空回りしているボート後部のスクリュー。

10. A. モンキレンチ。B.16 分休符。モンキレンチには二つの刃の幅を調整するナットがついている。それが「記憶を持っている」というのは、以前に使ったときのまま、モンキレンチの二つの刃が開いたままであるというこ

象』註解（2)」(『甲南女子大学ヨーロッパ文学研究』23、1999 年)。

と（F）。確かに 16 分休符と似る（図①）。

図①

11. A. 老神父の黄疸が出ている頭頂部。B. 黄身の部分に塩がかかった目玉焼き。上述。

12. A. 目玉焼き。B. 上から見たマーガレットの花。「裏を決して見せない」ので上から見た花。「裏側（revers）」には「敗北」の意もあり、『アフリカの印象』で用いられた〈手法〉のひとつはこの語に基づく[21]。タルーに破れたヤウルが『ファウスト』のマーガレット／マルガレーテに仮装したのはそれが理由。

13. A. 三つの黒鍵。B. 雪の上に置かれた手袋の三本指。三つの黒鍵は F♯、A♭、B♭。『海底二万里』（1870 年）のネモはノーティラス号のパイプオルガンを弾く際、闇落ちした人物にふさわしく黒鍵しか使わない。

14. A. カメラの三脚。B. 実のない三本のサクランボの枝。緑の光線は、太陽の残光を一緒に見ると、相手の本当の気持ちがわかるという迷信だが、これを広めたのはヴェルヌの小説『緑の光線』（1882 年）。エリック・ロメールの映画（1986 年）でも言及される。ルーセルは 1900 年頃、〈手法〉を使った習作作品として「エイの皮」という短篇を書いているが、この作品は「〈緑の光線〉岬の下のエイの皮（la peau de la raie sous la pointe du Rayon-Vert）」という句ではじまり、音が似る「緑の鉛筆の先の下にある髪の分け目の肌（la peau de la raie sous la pointe du crayon vert）」という句で終わる。

15. A. 公園の噴水。B. ホースの折れたところに開いた穴から吹き出す水。Z18

16. A. サーカスの綱渡り芸で使われる、中央が撓んだ安全網。B. 人が寝そべって撓んだハンモック。

17. A. 心臓から引き抜いた、まだ先端に血がついている矢。B. 赤インク

21）「「1° revers（服の折り返し）à marguerite（服の折り返しのボタン穴に挿すマーガレット）、2° revers（敗戦）à Marguerite（女の名）」。ここから、ファウストのマルガレーテの服を着たヤウルの、テーズ川での敗戦が生まれた」レーモン・ルーセル「いかにして私はある種の本を書いたか」、同上、114 ページ。

を浸した羽根ペン。「月下の賃貸契約」とは、この世（月下）に場所を借りている、つまり生きている間の意。それが「短くされた」ということは、矢があっという間に相手の心臓に命中したということ。そして矢はペンに比べて「無学」。

18. A. 光を掃射する灯台。B. 人が手に持つカンテラ。Z19

19. A. バラストを落とす気球。B. 砂が落ちる砂時計。

20. A. 太鼓。B. リボンが巻かれているロール。小間物屋などで、ロールに巻かれたリボンが切り売りされているということか。これはフェリーにとっても数少ない未解決の句であり、「かつて糸巻きだったあの道具」と「埃」がこのセリー屈指の謎だと嘆く。埃については倉庫から出してきたので埃を被っているということか……。

21. A. 赤い手袋。B. ファティマの手。枢機卿の衣装は赤い。「離婚している」は、手袋が片方だけであるということ。ファティマの手、あるいはハムサは中東などで用いられる、手の形をした護符。

22. A. 一対のオール。B. 二本の薬さじ（ヘラ）。

23. A. アルザス地方の女性が被る民族衣装の帽子。B. ラヴァリエール。アルザスの民族衣装であるコワフ（帽子）は大きなリボンが特徴。「いつか」としているのは、既婚の女性は黒いリボンを身につけることを示唆している。ラヴァリエールは 19 世紀に流行した幅広のネクタイ。ジョヴァンニ・ボルディーニが描いたロベール・ド・モンテスキューの有名な肖像画で、稀代のダンディーも巻いている。モンテスキューはシャルリュスのモデルとして知られるが、ルーセルの知人でもあった。

24. A. ドルメンとメンヒル。B. ベンチと標石。ベンチとドルメンはともにテーブル型で、標石とメンヒルはともに立石。ドルメン、メンヒルは第一歌でも謳われる。

25. A. 警官隊。B. 寄宿生のグループ。後者も整列させられているのか。

26. A. 黒板に書かれた円。B. 筆談で石盤に書かれたアルファベットの O。きわめてルーセル的な句。この石盤は第四歌にも登場する。164 も見よ。

27. A. 漏斗。B. ポワラー。ポワラーはワインの瓶などに被せて注ぎ口に

する道具。

28. A. ヴァンパイア。B. 蝙蝠。

29. A. 葬儀のお礼状。B. 喪中の人の名刺。ともに黒枠で囲われている。

30. A. 金の綬で飾られたケピ。B. 細い紐で括られた菓子包み。今でもフランスのパン屋やパティスリーで菓子を買うと、袋に包み、紐で括ってくれる。ケピは警官や将校が被る円筒形の帽子。ともに金の紐が一周しているイメージ。

31. A.WC。B.VV'。上述。

32. A. 折檻を受けて赤くなった子どもの尻。B. 桃。桃はつねに扇情的なので「かまととぶった眼が、見るも憚る」。181 も見よ。

33. A. 徒刑囚の足につけられた鉄球と鎖。B. 切れたロザリオの珠と小鎖。『レ・ミゼラブル』(1862 年）におけるミリエルとヴァルジャンを想起させる。

34. A. 革袋から漏れる水。B. 足の水疱から絞り出される水。Z20

35. A. 渦巻きのなかで回転している帆つきの筏。B. コマ。ポーやヴェルヌ作品を彷彿させる情景がルーセルではこうなる。帆はコマの軸にあたる。

36. A. 毒薬のラベルに描かれている赤いダイヤの印。B. ダイヤのエース。

37. A. 舷窓。B. 手鏡。

38. A. シャワーから出る水。B. 漏斗から出る水。

39. A. 防火壁。B. 舞台の迫り。「防火壁」はステージと観客席のあいだに設置される壁。ここではともに舞台にあるものが比されており、二回の上げ下げという動作も考慮されている。

40. A. 梁。B. 先生が折檻のため生徒の指を叩く定規。「葬礼の飾りつけ」は定規の目盛りに相当するか。

41. A. 絞首台の輪縄。B. 手錠の輪。「半分しか見せびらかさない」とは、手錠に二つある輪のうち片方だけということ。

42. A. 電信用の木。B. 鉄条網。

43. A. 鏡に押しつけたタンバリン。B. 大太鼓。詩句の大半を占める「ちんけな道化師が、端で、あることないことしゃべり散らすとき」は埋め草。

44. A. 雪片がついた赤いイースターエッグ。B. 砂糖のかかった苺。イー

スターエッグの由来のひとつとしてマグダラのマリアの逸話が正教会に伝わる（聖書には記載がない）。マグダラのマリアがローマ皇帝ティベリウスにキリストの復活を伝え、皇帝がそれを信じないでいると、彼女が持っていた白い卵が赤くなったというもので、ここから赤い卵は、キリストの復活という奇跡の象徴とされる。復活祭がおこなわれる 4 月に雪は珍しいか。

45. A. 花嫁。B. 聖体拝領する女児。季節はもちろん五月。

46. A. 社主の物故を報じる黒縁の新聞。B. 死亡通知状。

47. A. 拍子木。B. フラメンコのカスタネット。拍子木は、僧院で祈祷などの時間を告げるための道具。

48. A. バウスプリット。B. 指揮棒。「四分の二拍子」は、フランス語のアンコールのかけ声である « Bis, bis ! » のリズムを示唆するか。ヴェルヌ作品には船舶用語が溢れるが、たとえば『ハテラス船長の航海と冒険』（1866 年）に「ストーブにマストをくべろってか、ちっこいほうのトゲルンスルからバウスプリットのジブブームまで？」（第 1 部 22 章）とある。いずれにせよ尖った棒。

49. A. 墓碑。B. 決闘状。Z21

50. A. ホスチア。B. カード。フェリーは「聖職にない者のそれ」を前句の「書状（＝決闘状）」とするが、ルーセルは句が連続する際は —— を入れないため、やや疑問が残る。

51. A. チョークの破片。B. アスピリンの錠剤。「体にいい」とは限らないと思うが。ともあれ、ともに白い。

52. A. サンシー山。B. ダイヤモンドのついた彫刻刀。これはグラスリッツェンという手法で用いられる彫刻刀。ピュイ・ド・サンシー山はフランス中央山地の最高峰。

53. A. ギロチン。B. 葉巻切り。

54. A. 転車盤。B. シャープ記号。転車盤を真上から見る必要がある。二組のレール（平行する軌条）が斜めに重なり合えば確かにシャープ記号に似る。

55. A. 後脚立ちしているサーカスの馬。B. タツノオトシゴの群れ。タツ

ノオトシゴは『ロクス・ソルス』第三章にも。

56. A. 投げ縄。B. 絞首台のロープ。「準備のできた」というのは、これから処刑がはじまるので、まだ頭が入っておらず、ロープだけが揺れているということ。

57. A. 12 時半を指している腕時計。B. パルスメーター（脈拍計、ナースウォッチ）。脈を測るために医師が用いる、針が一本しかない器機（F）。あるいは医師は、時計の 12 時か 6 時の目盛りを起点に、脈が 20 回打つのに何秒かかるかを測る。

58. A. 手袋屋の看板の手袋。B. 決闘に際して投げる手袋。決闘を申しこむには相手に手袋を投げる。「中毒にする」は、客が手袋を欲しくてたまらなくなるということか。どちらの場合も手袋は空中にある。

59. A. クレーンの鉤爪。B. 餌のついていない針。「頭が空っぽ」なので、この釣り人は針に餌がついていないことに気づいていない。

60. A. ヴァイオリンの消音器。B. 小文字の m。Z22

61. A. パラソルの横にいる鰐。B. セップ茸の横にいる蜥蜴。

62. A. 血のついた茶色い歯。B. 葡萄の種。「殴り合いの途中」なので歯には血がついていて茶色い。

63. A. 家蚊。B. 蚊。蚊は血を吸う、つまり「大食漢」なので、手でパチンとやられるが（「拍手」）、家蚊（cousin）は人をあまり食わない「変わり者」なので、人から離れて天井に向かって飛ぶ（ので、とり違えて殺傷してはいけない）。

64. A. 射的場で、支柱に載った的の卵。B. 真珠つきのネクタイピン。「結び目に対して不貞を働く」とはネクタイから外されているということ。「噴水」は支柱と解したが、ともあれ卵が射的の的になっているのは『アフリカの印象』のバルベを思わせる。

65. A. ステッキ。B. 軍の連隊長の指揮棒。

66. A. 潜水夫が用いる梯子。B. 水槽のなかで、雨蛙がいる梯子。

67. A. 表面がぴったりとくっついている二枚の皿。B. 錠剤。このイメージは 84 に類似。

68. A. 奇術師のリング。B. 鍵束の輪。「新たなストック」ということはまだ鍵がついておらず、リングだけということ。

69. A. ハイデルベルグ城の巨大な酒樽。B. 貯金箱。ハイデルベルグ城の地下には、17 ～ 18 世紀に建造された、およそ 20 万リットルのワインを含有できる巨大な酒樽がある。Z23

70. A. 石畳を打ちこむ突き棒。B. 手紙の印章。『ロクス・ソルス』第二章の思い出。手紙、印章もルーセル的な語彙。

71. A. 矢で射貫かれたアーチェリーの的。B. 孵化する雛が卵に開ける穴。「賃貸借契約」とは、雛が卵を家として借りていたということ。

72. A. 岩を投げるデウカリオンの彫像。B. 小石を撒く親指小僧。デウカリオンはゼウスがひき起こした洪水を生き延び、石を投げて人類を再生した。シャルル・ペロー「親指小僧」の読書体験は『アフリカの印象』のセイル＝コル、ニーナの挿話にも。

73. A. ライオンを撃つ猟師の銃。B. 犬を撃つ拳銃。『三人のロシア人と三人のイギリス人の南アフリカにおける冒険』(1872 年)、『クローヴィス・ダルダントール』(1896 年) ほか、ヴェルヌ作品においてライオンを撃つ場面は複数ある。

74. A. 砂から頭部だけ出ているスフィンクス。B. 台座のついていない胸像。この詩がアフリカの印象を綴ったものであることを思い出させてくれる。ヴェルヌ作品におけるスフィンクスならば『氷のスフィンクス』(1897 年)、「ラトン一家」(1891 年) など。

75. A. 経血のついたシーツ。B. 鼻血のついたハンカチ。

76. A. 通りの名を示すプレート。B. 家の番地を示すプレート。ただし一般的に A は B より大きい (F)。

77. A. 脂ぎっているパピヨット。B. 濡れているパーマペーパー。「パピヨット」はバターを塗った調理用のシート。アルミホイルで代用できるので、今なら骨つきばら肉のホイル焼き。「コートレット」は骨つきのあばら肉の料理で、日本語の「カツレツ」の語源。

78. A. 傾いた踏切台。B. 鼠捕りの傾いたシーソー。鼠がかかるとシーソー

状の装置はバネで固定され、傾いたまま動かなくなる。これから鼠がかかるので「前途有望」だが、いったんかかれば「見捨てられる」(F)。「忠実な」のは人の重さに忠実、つまり素直に沈んで傾いているということ。

79. A. 列車から出る煙が充満したトンネル。B. 綿が詰められた外耳道。「貪欲」なのはトンネルが列車を飲みこんだから（F)。

80. A. 逆さに置かれた手品のカップ。B. 中指に被せられた指ぬき。

81. A. スクレーパー。B. ルーレットのチップ集め棒。スクレーパー（racloir）は物を削るための道具なので、この文脈ではスキージを指すはず。つまりルーセルがとり違えている。床の泥水などを掃き出すためのスキージには赤いゴムがついていて床を擦ると「鈍い音をたて」るが、ルーレットのチップ集め棒にこのゴムは当然ついていないので「無縁」。Z24

82. A. 並べられているキーユのピン。B. 並べられているチェスの白いポーン。キーユはボーリングの前身となった遊び。犬はピンを倒してしまうので「追っ払」われる。「名もな」いのはポーンがいちばん弱い駒だから。

83. A. 沈みかけた船から、柄杓でかき出している水。B. 人が出す唾。そんなに唾が出るものか疑問だが、『アフリカの印象』のフィリッポ（体全体が萎縮して、頭しかないように見えるサーカスの芸人）はつねに唾を飛ばしており、「唾は口からあふれるようにほとばしって、前方数メートルのところに落ちるのだった」[22]。これは「1˚ postillons（御者）à raccourci（近道)、2˚ postillons（唾）à raccourci（首を切られた男)」[23] という〈手法〉が解決されたもの。

84. A. 天文台の半円形の屋根。B. マクデブルクの半球。17 世紀ドイツの物理学者オットー・フォン・ゲーリケは二つの半球のなかを真空にし、八頭の馬からなる二つのグループに引かせたが球は離れなかった。片方と「死に別れ」ているので半球。このイメージは 67 に類似。天体観測つながりで、

22）レーモン・ルーセル『アフリカの印象』岡谷公二訳（平凡社ライブラリー、2007 年)、78 ページ。

23）レーモン・ルーセル「いかにして私はある種の本を書いたか」、同上、116 ページ。

二つの円が重なるイメージは、ヴェルヌ『毛皮の国』(1873 年)で問題になる皆既日食も想起させる。

85. A. 捨て子。B. ギャレット・デ・ロワの人形。この捨て子は、ユゴー『ノートルダム・ド・パリ』(1831 年)のカジモドへの目配せ。彼はノートルダム大聖堂前の「広場」に捨てられフロロに拾われる。

86. A. 疾走する馬に引っぱられている鎖つきの轅。B. 飛んでいく矢。

87. A. 板に貼られたメニュー。B. 剃刀の革砥。長方形の板に、それよりも小さなメニューが貼りつけてあるということ。このメニューからすると、B の革砥は革状のものではなく、板に貼りつけたタイプだと思われる。

88. A. 蠟燭の刺さっていない蠟燭スタンド。B. 上向きでぽつんと床に落ちている画鋲。A のスタンドは蠟燭を「おしまいまで燃やせる」よう、蠟燭を刺す釘が一本立たせてあるだけのタイプ(F)。

89. A. シャモアの角。B. カールしている睫毛。シャモアは主にヨーロッパの山岳地帯に分布するヤギに似た動物。お土産として角が売られているということか。

90. A. 柱時計の振り子。B. 壁に掛けられている湯たんぽ。フランスの湯たんぽは銅製で、長い柄がついたフライパンのような形状をしている。「生き返る定め」は、螺旋を巻けばまた動くから。

91. A. 運搬人を手押し車に結びつけているハーネス。B. サスペンダー。

92. A. 娼婦の家のレースつきの枕。B. 袖飾りのついた針刺し。「まだ穴を開けられていない(vierge)」と「ふしだらな女(impure)」を関連づけるべきか。

93. A. フェンシングのマスク。B. 金細工師の眼窩保護帯。

94. A. 皺が刻まれたこめかみ。B. 握りこぶしの甲のうえのほう。

95. A. 棺を覆う黒布。B. 写真技師が被る黒い冠布。ともに風にはためいている。

96. A. 留め金で閉じられた家族アルバム。B. 祈祷書。

97. A. 鉤状の義手。B. ワインのコルク抜き。『アフリカの印象』のタンクレード・ブシャレサスにも「腕がなかった(manchot)」。「貴い」のは義手

が立派に人の役にたつから。

98. A. 片腕が入った吊り包帯。B. 歯が腫れている人の頬を包む包帯。Z25

99. A. 鍛冶屋のふいご。B. 暖炉に送風するふいご。ルーセルは『わが魂』（1897 年）において、韻を生む詩人の魂を製鉄所に喩えた。

100. A. 夕日に染まる、鍾乳石がついている洞窟の半弧。B. 風邪をひいている人の喉。上述。フェリーはこの詩句からマックス・エルンストを想起している。

101. A. 殺人現場の血の海。B. 肺結核菌患者が吐いた痰。なので血が混じっている。

102. A. 鐙の留め具。B. 黄色いパラソルの壊れてしまった紐。「空っぽの」は足を掛けていないということ。黄色は謎。

103. A. 大砲の砲弾。B. 肉を食べていた人が吐き出す弾丸。「見かけよりも危険な種」は、肉に残っていた銃弾。なので食べていたのは「ジビエ」。

104. A. 射撃の標的。B.〈二の目〉のドミノ牌。「大水」は謎。Z26

105. A. エレヴェーターの籠。B. シャンパンを空けたときの栓。

106. A. 池の水面に浮いている釣り糸。B. コンパスの針。「留守にされた」というのは釣り人が糸を放っておいているということ。コンパスに似るなら、この池は丸池。

107. A. 発砲している歩哨の、白い背景に浮かぶ黒い影。B. 影絵。歩哨でなくとも影絵になると思うが……。よって埋め草。

108. A. 獲物めがけて飛んでいくボーラ。B. バーベル。ボーラは狩猟用の道具、バーベルに似るので、ここでは二本の紐の先端に玉がついているタイプ。「陰険」なのは獲物の足をこんがらがらせるから。

109. A. フルーレで撓むフェンシングのサーベル。B. 鉈鎌。

110. A. キツネの口に落ちるカラスのチーズ。B. 円盤が吸いこまれていくトノーの口。トノー（樽）は、小さな円盤を、板に空いた複数の穴めがけて投げ入れるゲーム、また、その台のこと。やがて中央の穴の代わりに、口を開けたカエルの置物が据えられ「カエルのゲーム」と呼ばれるようになった。

A はラ・フォンテーヌの寓話のなかでもっとも知られた「カラスとキツネ」への目配せ。チーズをくわえていたカラスにキツネが近づき、カラスの美声を褒めると、カラスはいい気になって歌を披露し、チーズを落とす。それをキツネが手に入れる。教訓は、おべっか使いには気をつけろ。

111. A. 赤い蠟封が五箇所についた封筒。B. ダイヤかハートの五。「変わり者が、宛先を机に向けて置いた」とは、封筒が裏面を表にして置かれているという、ただそれだけのこと。証券が入っているので封蠟は四隅と真ん中の五箇所につけてある。

112. A. 農業用のフォーク。B. 食事用のフォーク。

113. A. 劇場で、壁で隔てられた二つの舞台にかかる、雲の描かれた幕。B. 鼻にかかったヴェール。A の壁が B の鼻筋に相当。サルバドール・ダリ作品を想起させる。

114. A. 刀身だけの二本の剃刀。B. 刃が開ききった鋏。

115. A. 緑の鎧戸を備えた白い家の連なり。B. ロックフォールチーズ。フランスの鎧戸は緑であることが多く、ロックフォールチーズの黴の部分も緑。

116. A. ホースが一本くねっている芝生。B. 髪の毛が一本ついたアカデミー・フランセーズ会員の肩。「不死なる者」は、その栄光が不滅であるアカデミー・フランセーズ会員のこと（F）。その服は緑。

117. A. ポールで吊られた看板が両側の建物に掲げられている大通り。B. プレートつきの鍵がドアに掛かっているホテルの廊下。

118. A. 休戦交渉のために派遣された使節。B. 目隠し鬼をしている子ども。陣地をさとられないよう使節は目隠しされて本部に連行されている。同様のシーンが第三歌にも見られる。目の見えない使節といえばヴェルヌ『ミハイル・ストロゴフ』（1876 年）だが、ヴェルヌには『目隠し鬼』（1853 年）というオペラコミックもある。ただし上演されたのはルーセルが生まれる前。Z27

119. A. 市場の人夫の白い帽子。B. 教皇の三重宝冠。この「聖父の帽子」も白い。A についてフェリーは帽子ではなく、人夫が頭に乗せている、いくつも重ねられた籠の可能性を示唆している。

120. A. 緑の服を着た乳母が、片方だけ出している褐色の乳房。B. 殻から実が出ている栗。授乳するには片方だけ出せばよい。フェリーにいわせれば、これはマルグリットも思いつかなかったことを悔やむであろう、この詩篇のもっとも美しい詩句。

121. A. 水が溢れそうになっている杯。B. ひっくり返った赤い傘。「ひっくり返」っているのは大雨だからで、よって傘のなかに水がたくさん入っている。「赤」は埋め草か。

122. A. 水車の輪。B. トノーの輪。「辛い仕事」なのは、輪が投げられ、遊戯台にぶつけられるから。トノーは 110 に既出。

123. A. 白い壁の前の、傘が五本入った傘置き。B. なにも書かれていない五線譜。「うぶな」のはまだ音符が書きこまれておらず、五線譜だけであるということ。

124. A. ひげ剃り用の鏡。B. 歯医者が使う拡大鏡。

125. A. 輪を飛ばす前のグラース。B. 口笛を吹くために二本の人差し指を突っこんだ口。「グラース」は二本の棒を使い、相手に輪を飛ばし合う遊び、ないしはその道具。「輪を飛ばす前」なので二本の棒と輪が合わせてイメージされており、よって、二本の指を入れた口とのとり違いが生じる。

126. A. 埃をかぶった拍車。B. 鶏の暢思骨。鶏の暢思骨のそれぞれの端を二人で引っぱり合い、長いほうを取った者はその願いが叶うという迷信がある。「吉日」なのは食べられる鶏への皮肉（F）。拍車がなぜ埃を被っているかは謎。

127. A. 鼻をかんだときの鼻水。B. 眼から落ちる二粒の涙。「育ちの悪い輩」ゆえにハンカチでかんでおらず、指のあいだから汁が二筋漏れている。

128. A. アスファルトを満たしている桶。B. インクを満たしている瓶。

129. A. 赤い旗を振っている腕。B. 何度も振っているマッチ。火が消えていないので、マッチの先端は赤いまま。

130. A. 文字が記されている丸太。B. 刻印がされているワインのコルク栓。

131. A. 壁に肘を凭せかけているモデルの腕。B. なにかを弾こうとしている人差し指。

132. A. 開かれた、揺り籠の白いカーテン。B. 広げられている本のページ。動作を伴っているとり違い。ゾーの挿画で明らかなように、B の男が読んでいるのは『新アフリカの印象』。Z28

133. A. 折り畳み式の黄色いメートル尺。B. 靴に結ばれた黄色い靴紐。ともにジグザク。「夏色」は向日葵のイメージから黄色と思われる。

134. A. 輪回し遊びの輪。B. 腕時計のテンプ。テンプは、天輪などからなる機械時計の「心臓」部で、ヴェルヌの幻想短篇「ザカリウス師」(1854年）では人の心とのとり違いがおこなわれる。輪回しでは音を鳴らす。

135. A. 階段に敷かれた絨毯を押さえている棒。B. 大箱の蝶番。「空にされている」ということは、この大箱は蓋が開いており、そこに階段に似た段差ができている。

136. A. 首を傾げる犬。B. 聞き返すために首を傾げる仕草。上述。

137. A. 教皇のカロッタ。B. 黄身を出すために一部を開けた卵の殻。カロッタは聖職者が被る椀形の小帽子で、教皇のそれは白い。119 に続き、教皇と帽子。

138. A. 雪に覆われた屋根。B. 紙を被せられた本の背表紙。「真新しい」ので雪のように白い。「背を上にして置かれ」ているというのは、本の小口を下にして立ててあるということ。「小難しい」本を読んでいると思われるのは恥ずかしいので紙を被せているのか。Z29

139. A. 馬が緑の野原に落とした糞。B. ビリヤード台の上の的玉。ビリヤード台はもちろん緑。

140. A. ふくらはぎを覆う、泥が飛び散った白いストッキング。B. 卵についている糞。ふたたび糞。鶏は総排出腔を持つ動物なので糞も卵も出口は同じ（であることを、ルーセルはもちろん知っている)。

141. A. 水抜きした池から出てきた骸骨。B. 鳥の手羽を食べたあとの残骸。

142. A. クルトンをつまんでいる手袋をした人差し指と中指。B. パン屑が挟まっている二本の歯。上述。フェリーは中指と薬指の可能性も示唆するが、さすがに難しいだろう（やってみればわかる)。

143. A. 腕を組んで歩いている二人の黒人の腕。B. 絡まっている二本の釣

り針。

144. A. 動力ハンマー。B. ミシンの針。

145. A. 燕尾服を着ている人が椅子に座るときに広げた裾。B. 偽の頬髭。

146. A. 鉄柵のついた哨舎。B. 鉄柵の前にある犬小屋。

147. A. 火鋏につままれた燃えさし。B. 宝石細工師のピンセットにつままれたルビー。A は『アフリカの印象』で上演されるシェイクスピア『ハムレット異本』の一場面への目配せ。

148. A. 円座クッション。B. ドーナツ。

149. A. 馬用の空の餌袋。B. 裏返したズボンのポケット。「平たい」のは空ということなので馬がかわいそう。ポケットをひっくり返したのは、家を訪れた「役人」にお金がないことを示すため（F）。

150. A. 手品のカップに入る二つのサイコロ。B. コーヒーカップに入る角砂糖。ティーカップかもしれないが。

151. A. 娼館の看板の番号。B. 邸宅の番地。

152. A. 公園の地面を均すローラー。B. ブロッターのローラー。ブロッターは、書いた文字の上に押しあてて余分なインクを吸い取る文具、吸取器とも。文字が「吸取紙」に写るので「その秘密」が「教えこ」まれる。

153. A. 鼻の穴につっこんだ人差し指。B. 耳の穴につっこんだ小指。小指が「多弁」なのは「ちゃんとわかっている（Mon petit doigt me l'a dit）」という言い回しに由来し、耳の横で小指を立てるジェスチャーを伴なう。

154. A. 罫線の入った下敷き。B. 縞模様のブラウス。「控えめに助けを申し出る」のは、この下敷きを使うと罫線が紙の下にかすかに透けて見えるから。Z30

155. A. 二本の指でつくった角。B. 蝸牛の頭。「角をつくる」は、人差し指と中指で動物の角を模すサインで、相手を侮蔑するジェスチャー。

156. A. ロバ帽子。B. 高級な白い手袋をはめている、表現力豊かな同じ（155 の）手。ロバ帽子は長い耳のついた紙の帽子で、できの悪い生徒に罰として被せた。ふたたび帽子のとり違い。

157. A. 視力表。B. ABC が書かれた紙。B は学習帳、162 にも。

158. A. 正しくも横か縦に移動したクイーン。B. ズルをして横か縦に移動したビショップ。チェスのビショップは斜めの方向にしか動けないので、縦横移動をしたら「ズル」。クイーンは八方向に移動することができ、ルークは縦横に動かせる駒なので、「ルークの滑り」とはクイーンが縦か横に動いたということ。

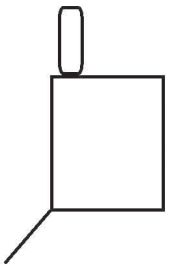
159. A. 霊柩車の棺の上に置かれた、菫でつくった十字架。B. 黒い宝石箱を装飾しているアメジストの破片でできた十字。

160. A. 客車の吊り布に突っこまれた腕。B. カヴァーを被せたステッキ。原文の「吊り布（brassière)」は一般には「子ども用の胴着」などの意だが、この句で指している物はゾーのイラストを見ると一目瞭然。Z31

161. A. 玉入れに向かって投げつけられた球。B. 友人の口に投げつけられたミートボール。「玉入れ（passe-boule)」は、公園などに置かれている遊戯具。ボードに、変顔をし、口を大きく開けた人物が描かれている。よってミートボールを投げつけられた者も、酔って表情がおかしくなっていると思われる。

162. A. 松葉杖がたくさん立てかけてある壁。B. 大文字の A がたくさん書かれた学習帳をひっくり返したもの。A の文字をひっくり返すと松葉杖に似る。ルールドには多くの病人が訪れるので、子どもが練習のために書かされた無数の A と同じくらい多くの松葉杖が立てかけてある。だが、フェリーも言うように、立てかけるのならば A と同じ向きにすると思うが。

163. A. 掛け紐のついたナプキンに触れているバゲットの残り。B. 一本の指が伸びている、白い飾り紐がついた手袋。図にすればこうした感じ（図②)。



図②

164. A. 洗面台の明るいところに置き忘れた金の結婚指輪。B. 封書に書かれた金文字の O。指輪はしばしば洗面台に置き忘れる。O は 26 にも。

165. A. ピンクのサテンの端切れを丸めたもの。B. 丸めた絆創膏。

166. A. 気球。B. 香水壜のポンプの部分。こうした気

球をヴェルヌの気球とどう比せというのか。

167. A. 靴下の修繕に用いる卵型の木型。B. 山羊の糞。「山羊は排便に時間をかけますか？」と ChatGPT に訊ねたところ「山羊は一般的に排便に時間をかけることはありません。山羊は反芻動物であり、食べた食物を一度に胃に送り返すことがありますが、その後もすぐに排便することが多いです。／山羊の消化システムは効率的で、食物を素早く消化し、排便（ママ）物を迅速に体外に排出します。排便に時間をかけるような行動は一般的ではありません。排便は一般的に自然に行われる生理的なプロセスであり、山羊は通常特別な努力を払って行わないことが一般的です（後略）」云々とのこと[24)]。だが、ルーセルはそう考えなかった。ともかくまたも落とし物。そして履くものとセットになっている。

168. A. パンパイプ。B. ミテーヌの切れ端。ミテーヌは女性用の、指先のない手袋。「口がきけない」のは手袋はパンの笛のようにメロディーを奏でないから。

169. A. 寝床からひっぱり出される湯たんぽ。B. 酔っ払いの白いチョッキからずり落ちる金の懐中時計。寝床のシーツも白い。そして「鼓膜に意地悪」する懐中時計と異なり、湯たんぽは音をたてないので「失語症」。

170. A. 青空高くあがって点のようになった風船。B. 青い書類についた赤いインクの染み。役所で用いられる書類は青い。フェリーはこの役人と風船から、かのドゥアニエ・ルソーを想起している。黒白赤黄に比べ、青への言及は〈とり違い〉のセリーでは珍しい。

171. A. 雑巾で拭いてきれいにした黒板。B. ハンカチで顔をぬぐったばかりで濡れている黒人の広い額。

172. A. 曇りガラスに自分の名前を書く黒人の湿った指。B. すらすら書いている鉛筆の芯。前句と同じ人物が再登場している稀な例。もちろん鉛筆なのは芯が黒いから。

173. A. 指を横にして振り、否定のジェスチャーをしている黒人の指。

24）OpenAI.2023. ChatGPT August 3 Version [JAPANESE]. https://chat.openai.com

B. コンパスの針の黒い先端。「横にして」左右に振るのはやや不自然だが、そうしないとコンパスととり違えることはできない。ふたたび黒人の指で、黒人三部作の最後の句。やはり新アフリカの印象なので。

174. A. 天井が平らなテントの壁。B. 激しい日射しを浴びた帽子の垂れ。帽子ととり違えるには、テントの天井は「平ら」でなければならない。

175. A. ハバナ葉巻の山に置かれた煙草一本。B. ブロンドに混じった白髪一本。

176. A. サーカスで、腕をくぐらせた二つのリング。B. 指にはめたぶかぶかの二つの指輪。ぴったりだと A に似ない。

177. A. 地図の上に放っておかれたコンパス。B. 故障して動かない四角い腕時計。このコンパスは製図用の文具で、方位磁石である 106, 173 のコンパスとは異なる。

178. A. 手押し車の先端部。B. 横に倒したカンピロメートル。カンピロメートルは、地図上の二点の距離を測るマップメジャーの一種（ゾーのイラスト参照)。「使ったあと」なので横に倒してあり、手押し車ととり違えられる要因になっている。Z32

179. A. 後ろ立ちしている馬の、捻られた前足。B. 縄編み。縄編みは、二本の綱を交差させた模様。船のケーブルに由来し、ケーブル編みとも呼称される。セーターに用いられるアラン編も縄編みのひとつ。「賢い馬」はおそらく調教されたサーカスの馬で、前肢を捻って交差させるポーズをとっている。

180. A. V を指している晴雨計の針。B. 枝毛の先。この針が「よき忠言者」なのは晴雨計が天気を教えてくれるから。V は「VARIABLE（天気が変わりやすい)」の頭文字で、今が「鬱陶しい天気」であるから。針と合わせると、枝毛と同じ Y 字形になる。

181. A. 破れたズボンから見える尻の割れ目。B. 靴下の穴から見える二本の足の指。32 を思い出せ。

182. A. ボード上に山積みにされたチェッカーの白の駒。B. 大盛りのポテトサラダ。フランスのポテトサラダである「サラド・パルモンティエール」

はジャガイモを潰さないのでチェッカーの駒に似る。ちなみにマヨネーズも用いない。

183. A. 灰色で艶々したガラスタイル。B. 床に落ちている薄紙。端を折った名刺を置いていくのは訪問先が留守だったときの作法で、使用人や郵便ではなく本人が来訪したことを示す。ここでは名刺の束の「最初」にあった薄紙が、名刺と一緒に床に落ちたと解した。

184. A. ビー玉が入っていないソリティアのボード。B. スパイクが糞につけた跡。「ソリティア」は円盤に開いた穴にビー玉を入れていくゲーム、オンリーワンとも。そして、また糞、何度目？

185. A. ショーウィンドーに飾られた未使用の白い腕章。B. ネクタイの結び目。初聖体拝領の儀式の折、子どもたちは腕に白いリボンをつける。

186. A. 唇の下の鬚＋垂れさがっている口髭。B. フェルマータ記号（図③）。この口髭は「覇気」がないので下向きに垂れさがっている。

図③

187. A. 穴の開いた土壺の底。B. 穴の空いた黄色いスパンコール。割れていても底だけは無傷ということだが、これはラ・フォンテーヌの寓話「陶器の壺と鉄の壺」への目配せ。壊れやすい陶器の壺（＝土壺）は、鉄の壺が守ってくれるというので一緒に旅に出たが、道中、鉄の壺にぶつかって壊れてしまう。教訓は、同じ身分の者とつき合え。「雨で輝」いているのは、光を反射するスパンコールに対応してのこと。

188. A. ブラインドカーテンの細長い板。B. サヤインゲン。このブラインドカーテンはもともと緑か、落日の影響を受けてそう見えたのだろう。Z33

189. A. 山積みになった封筒。B. 調理に失敗して膨らまなかったポム・スフレ。ポム・スフレはじゃがいもを揚げて膨らませた料理。

190. A. 雪景色のなか、絞首台で吊されている者たち。B. 天井から吊された、紙製の雪だるまの飾り。B はクリスマスの光景だろう。

191. A. 挨拶のキスが白い手袋に残した唾液の輪。B. 水を切ったストローがつけた円い印。

192. A. 大理石の女神像の右手。B. 君主が取る結婚相手の手。フランス語で女性に結婚を申し込むことを「手を要求する（demander la main）」という。「ガラガラの代わり」なので、この君主は結婚適齢期にあり、相手も貴婦人であろうから、その手は大理石のように白い。

193. A. 麻疹に罹った子ども。B. スーツを着たアメリカ原住民。アメリカ原住民はフランス語で「赤肌（Peau-Rouge）」と呼称されていた。ヴェルヌ作品にもたびたび登場する。そして麻疹に罹ると赤い発疹が出る。1897 年、『代役』の不成功はルーセルの「全身に赤い斑点の生じる一種の皮膚病をひきおこした」[25]。

194. A. 船が進水の際に滑っていく溝。B. アイススケートの練習のために氷につけられた溝。船の進水に用いられるのは凹型ではなく、レールに似た凸型であるようだが。

195. A. 蠟燭を握っている拳。B. 煙草を吸っている貧血の人の唇。唇は普通赤いが、「貧血」なので「赤味がない」。よって A の拳と同じ血色。そして蠟燭と煙草はもちろん白い。

196. A. ビリヤード台の上で白い球を打つキュー。B. 緑のリボンから外される、ピンのついた真珠。ビリヤードで二度突きは御法度なので「恥知らず」。ビリヤード台はつねに緑で、「赤でない球」は白い球。真珠も白い。

197. A. 灰色の犬の尾。B. メトロノームの針。犬は尾を振る。「メトロノームの音がするアンテナ」を備えているのはメトロノーム以外にあり得まい。

198. A. 宛名が書かれ、縁が布地で補強されている封筒。B. 名前が彫られたプレート。プレートは教会などに飾られている、寄進者の名が彫られたプレートか。ないしは納骨堂を想起すべきか。

199. A. 太鼓のバチ。B. 画家が使うハンドレストの先。「温厚」なのは、ハンドレストはなにかを叩くために使われることがないから。

200. A. ボタンの入っていないボタン磨き板。B. 鉛筆キャップの、円部のついた裂け目。ボタン磨き板は、ボタンを磨きやすくするために固定する板

25）レーモン・ルーセル「いかにして私はある種の本を書いたか」、同上、138 ページ。

で、ボタンを差しこむための円い窪みがある。『アフリカの印象』のベクスはこの道具を使って自身の発明品――どんなに遠くにある金属でも引きつける物質エマンティーヌとその作用を打ち消す物質エタンシウム――の効果を示した。フランス語では patience で、これは一般的な意味では「忍耐」であり、〈手法〉が用いられている[26)]。ただし、ルーセルはこの句では「重いボタンの空っぽの避難所（un vide asile à boutons lourds）」として patience という語を使っていない。

201. A. 風に煽られて衝突した二艘の船。B. 二人の男が足を温めるためにぶつけ合っている二つの木靴。「お彼岸の頃」は彼岸嵐、涅槃西風が吹いている時節ということ。よって船は風に煽られてぶつかった。錨と船を繋ぐ鎖は B の男たちの足に相当する。Z34

202. A. 殴りにいっている、ボクシングのグローブをはめた拳。B. 飛んでいる革のボール。「試合がない日」であればむしろグローブをはめないはずだが、フェリーは私闘のためと解釈している。

203. A. 山札の上にひっくり返された、切り札であるスペードの 10。B. ドミノの 5 のダブル牌。ともに黒点が十個ある。スペードの 10 は山札の上に置かれているため、厚みのあるドミノ牌とのとり違いが生じる。

204. A. 万力が曲げている針金。B. 毛抜き鋏に挟まっている灰色の毛。

205. A. ケルン大聖堂。B. 小さな礼拝堂。

206. A. 北極の氷山。B. コップに入れる氷。氷のほうは飲料に入れられるので「職務に縛られている」。北極の氷山はヴェルヌ『ハテラス船長の航海と冒険』で船長たちの行く手を阻む。

207. A. 漁網のなかを動き回ってるクモ（ガニ）。B. ヘアネットに紛れこんだ虱。A は原文ではクモ（araignée）とだけあり、フェリーはこれを海の

26）「1°「patience」（忍耐）à antichambre ministérielle, 2°「patience」（ボタン磨き板）à entiche ambre mine hystérique（夢中になっている琥珀の方へと飛んでいく鉛筆の芯）」レーモン・ルーセル、同上、126 ページ。antichambre ministérielle は「大臣の待合室」の意。ルーセルはこのフレーズを、あるイラストのなかに見つけ、そこには「忍耐」強く人を待っている男が描かれていた。

生き物であるクモガニ（araignée de mer）とするが、「漁師の家」を字義通りに読めば、この網は今、陸に揚げられているのであり、そこに巣を張ろうとしてクモが徘徊しているとも解せよう。

レーモン・ルーセル『新アフリカの印象』

第二歌

ピラミッドの戦場跡

91–506 行 〈とり違い〉のセリー [27)]

91 とり違えを――井戸のなかで、フランクリンが
92 発見した雷を危険なく消失させる器具を、
93 裁縫針に通した灰色の糸と [1]
94 ――士官に昇格したばかりの人の腕を飾る星と、
95 花火職人が空にあげる白い三連星を [2]
96 ――一本の線が真ん中を突っ切る黒板を、
97 司祭の涎かけと [3]――今にも破裂しそうなほど
98 熱い小型温度計の、盥のついた
99 水銀でいっぱいの管を、丸頭ピンと [4]――犬が近くで
100 触れているために生温かい、主のいない首輪を引きずる綱を、
101 輪っかのついた日傘の紐と [5]――完璧な仕組みの
102 螺旋式シャワーを、うぶな
103 巻きばねと [6]――死した蠟燭にぴったり被さる蠟燭消しを、
104 おぼこ娘のダンスカードについた白い鉛筆を削って
105 黒くなったものと [7]――片隅の、おぞましい歯でできた
106 むき出しの水球を、水分をさほど摂らない
107 カナリアの水飲み場と [8]――波に持ちあげられ、務めを
108 免じられた後部と、嵐が乱暴者然と手を貸す
109 居心地の悪そうな風車を [9]――ナットが
110 記憶を持っているモンキレンチを、
111 16 分休符と [10]――皿にぽつりと除けられた、真ん中に塩が
112 たっぷりかかった目玉焼きと、黄疸の出ている
113 年老いた神父が典礼でさげた頭を [11]。そして枝のない、
114 輪切りになった、裏側を決して見せないマーガレットと、
115 目玉焼きを [12]――壮麗な白さに遠慮なく筋をつける、

27）底本は Raymond Roussel, *Nouvelles impressions d'Afrique, Op.,Cit.,* p.65–137. 挿画のキャプションは Laurent Busine, *Raymond Roussel Contemplator enim*, La lettre volée, 1995, p. 40–72 に拠った。

光沢のある宵の手袋のしゃれた三線と、
黒鍵の三姉妹を[13]――緑の光線が放たれたときの
カメラの足を、捨てられた三粒のサクランボに
残っているものと[14]――ついでに、水を撒くときに
穴の開いた肘から発生する哀れな噴水と、Z18
公園のそれを[15]――だらりと身を委ねるハンモックと、
サーカスの、二等分線を引く安全網を[16]
――心臓から引き抜いた、月下の賃貸契約を
短くされた無学な矢を、赤いインクを浸した、学のある
鵞鳥の羽根ペンと[17]――隅々まで蒂がけをする
権限を自らに授ける海の投光器を、
人が携える無言の角燈と[18]――出発する気球乗りが　Z19
日のもとにくり出すバラスト投擲を、
砂時計の内部落下と[19]――新品のリボンが巻かれている、
かつて糸巻きだったあの道具のように、売りに出されたばかりの蓋つきロールと、
宿営のあとの埃をかぶった太鼓を[20]――枢機卿の、
離婚している空の手袋を、そこから幸せが生まれる、
珊瑚でできた、上質なぶ厚い手と[21]――薬剤師が
使う二本の箆と、小舟のなかの
一対の櫂を[22]――見目麗しいアルザス娘の頭を
いつか飾る結び目を、襟元にある
ラヴァリエールの結び目と[23]――ベンチの傍の
標石と、ドルメンからあまり離れていないメンヒルを[24]
――足並みを揃えた警官隊を、お祭の日にすれ違う、
家庭を持たない寄宿生たちの悲壮な群れと[25]
――失声症の人の石盤で花開く弱々しい0と、
黒板にひと筆書きされた円を[26]
――瓶の注ぎ口に被せるものと、8の字を
無数に描きながら、カフェのテラスを
濡らす漏斗を[27]――熱帯の地で、
薄暮の頃に蝙蝠と、
ヴァンパイアを[28]――遺族らが、私たちから
笑みを払い除け、感謝を述べる書状を、喪に服したばかりの
来客の名刺と[29]――聞こえのいい
砂糖菓子屋の包みに掛かった細紐と、
ケビ用の金の綬を[30]――近くに有気記号がある、
頂点を下にした二つの山型と、
廊下の奥にある戸の印を[31]――かまととぶった眼が、
見るも憚る桃と、悪さをして鞭を打たれた子の
赤くなった尻を[32]――切れたロザリオに残る、

156　珠のついた小鎖と、昔日の徒刑囚の、
157　鉄球のついた鎖を [33]——針を使って、足のまめから良い具合に
158　搾り出した水と、砂漠において、裏切り者の剣の仕業で、
159　革袋から漏れ出たそれを [34]——風が口賢しく　Z20
160　荒れ狂うとき、渦巻きのなかで帆を立てる筏を、
161　コマと [35]——毒入り瓶の菱形のラベル、
162　その赤い標章を、ダイヤのエースの
163　真ん中にある欠片と [36]——近視の彼が髪をとかしながら、
164　見える範囲を合わせる鏡と、
165　舷窓用のそれを [37]——園芸用の漏斗から出る
166　咄嗟のにわか雨と、シャワーの蓮口から
167　頭に降るものを [38]——避難警報なしに
168　防火壁をテストのために二度下げるのを、
169　迫りをそうするのと [39]——神経をかき乱され、
170　小学生のむき出しの指を叩く定規と、葬礼の
171　飾りつけがされた梁を [40]——晒し台の
172　首吊り縄を、半分しか見せびらかさない
173　手錠と [41]——障害物で芝生を縁どるものと、
174　植えられたばかりの、線が張られた電信用の木
175　一本を [42]——ちんけな道化師が、端で、あることないこと
176　しゃべり散らすとき、その大太鼓と、
177　鏡に押しつけたタンバリンを [43]——強く吹く風もないなか
178　降りはじめた雪が、一箇所に集められた赤い卵に落ちたとき、
179　その卵を、砂糖をかけた数個の苺と [44]——五月、どんよりとした季節が過ぎたあと、
180　聖なる場所の中央に立つ花嫁を、聖体拝領するひとりきりの
181　女児と [45]——型どおりの文言に終始する
182　人を食った死亡通知状と、社主の物故を報じる
183　黒縁の新聞を [46]——和音に酔いしれた
184　スペイン人が、ステップに合わせ、手で打ちつける物と、
185　拍子木を [47]——四分の二拍子のアンコールを
186　何度もひき起こすであろう指揮者の得物と、悪天候で碇を降ろした
187　小舟のバウスプリットを [48]——嘲笑った者を決闘場に
188　呼びつける書状と、白い大理石に黒い名が記された、Z21
189　墓所壁面の四角を [49]——教会内陣の中央で、
190　かすかな音を立てながら聖体が奉挙されるとき、そのホスチアを、
191　聖職にない者のそれと [50]——定年を迎え、
192　難問から遠ざかって細々と生きる白墨の残骸を、
193　体にいい錠剤と [51]——細工にとりかかる職人が、
194　純潔のガラスに筋を彫りこむために使う宝石と、
195　サンシー山を [52]——殺人犯が夢に見る、自分の体を

196 短くする道具を、葉巻切りと [53]
197 ――駅の転車盤の上で、四方に伸びる印となって
198 座している、レールがなす十字形を、
199 シャープ記号と [54]――サーカスで、偉そうに高く胸先を掲げ、
200 長いこと後脚立ちしている馬の一団を、
201 行くあてのないタツノオトシゴの群れと [55]――飛んでいった投げ縄を、
202 大風に弄ばれる、準備のできた絞首台の
203 ロープと [56]――双の針が直径をなす際の、
204 しばしば時間が読みとりにくい腕時計を、
205 脈を測るときの目盛盤と [57]――誰かさんに向かって
206 飛んでいく決闘のための手袋と、看板として頭上で客を
207 中毒にするそれを [58]――はっきりした的に向かい、水位のさがった川に
208 クレーンで降ろされる鉤爪を、頭が空っぽの漁師の、
209 餌のついていない針と [59]――ブリッジにむりやり嵌めこみ、
210 ヴァイオリンを唖にする付属品を、
211 小文字の m と [60]――入植地の庭園に闖入し、Z22
212 パラソルの横にいるどこぞの鰐を、
213 セップ茸に寄りかかっている蜥蜴と [61]――殴り合いの途中で
214 吐き出された茶色いみそっ歯を、舌を使って
215 果物の粒からとり除いた種と [62]――度重なる拍手によって
216 捕まる、おかわりをやめない大食漢と、天井の中央に突進していく、
217 変わり者の家蚊を [63]――結び目に対して不貞を働く、
218 真珠つきのピンと、小屋の射的で、
219 卵が飾る噴水を [64]――連隊の行進で街路がざわめくとき、
220 握りのついた、洒落た籐の杖と、空に向かって
221 跳びはねるステッキを [65]――ガラス鉢のなか、
222 暇で死にそうな雨蛙がいる梯子と、潜水夫が落命することなく
223 使うそれを [66]――人を治す錠剤と、
224 暖かい料理が入り、吸引力で、縁と縁がぴたりと合って
225 一塊となった皿の組を [67]――腕をまくり、手を盛んに
226 動かして奇術師が奮闘するとき、巧妙にできたリング一式を、
227 鍵束の円環の新たなストックと [68]――酒樽の王たる
228 ハイデルベルグ城の至宝を、貯金箱と [69] Z23
229 ――読むものを入れ、封蠟の湖を
230 叩く印章と、作業中の突き棒を [70]
231 ――賃貸借契約が終了するとき、雛が卵に開ける穴と、
232 馬上の女が紙の円盤に残すそれを [71]
233 ――ヒースの荒野めがけて小石を掻く親指小僧と、
234 彫刻家宅の、難を逃れ、岩を投げる
235 デウカリオンを [72]――撃たれたライオンが耳ざわりな

236　咆哮をあげるとき、その猟師の銃を、狂犬病に罹った茶のプードルに、
237　まっすぐ弾を浴びせるリヴォルヴァーと [73]——台座を欠いた胸像と、
238　砂に埋もれたスフィンクスの、
239　露わに残されたところを [74]——洗濯屋が来る日、
240　経血の緋色で飾られたシーツを、
241　鼻血のついたハンカチと [75]——街のあちこちにある、
242　名だけを示す青いプレートを、
243　家の番地が記されたそれと [76]——髪の房から水分がベッドに染み出てしまう
244　パーマペーパーと、コートレットを包む脂ぎった
245　パピヨットを [77]——前途有望な鼠とりの、見捨てられた
246　かつてのシーソーと、忠実な踏切台を [78]
247　——蒸気が充満するとき、貪欲なトンネルを、
248　綿で栓がされた痛ましい外耳道と [79]
249　——三番目の指に適し、それに付す鞘である指ぬきと、
250　逆さに置いたときの、手品のカップを [80]
251　——赤いゴムとはつねに無縁でも、ディーラーたちの使うかき棒と、Z24
252　鈍い音をたて、泥を掻きとるスクレーパーを [81]
253　——その犬にしてみれば、自分を追っ払うために
254　つくられたような遊びを、チェスで、黒が白から取って除けた、
255　名もなきポーンの一団と [82]——水でいっぱいのボートの舷側が
256　沈みかかっているとき、柄杓から出るものを、
257　人の唾と [83]——天体望遠鏡用の屋根を、
258　マクデブルクの強力な半球のうち、相方と
259　死に別れたほうと [84]——秘めたる関係の果実であり、
260　とある円形広場に捨てられた子どもを、王を輩出するギャレットから、
261　頭を出しているその住人と [85]——横に並んだ
262　二頭の馬が暴走するとき、鎖のついたその轅を、
263　低空飛行する矢と [86]——ケースから出した、
264　かみそりの革砥と、縦長の板のせいで余分な縁ができている、
265　注文用のメニューを [87]——客い人が使う、
266　蠟燭をおしまいまで燃やせるスタンドを、針先を空に向け、独り離れて暮らす、
267　平らな画鋲と [88]——優しげな瞳から飛び出した、
268　カールする睫毛と、スイスのバザールで売られている、シャモアの
269　黒い角を [89]——釘に掛けられた湯たんぽと、
270　生き返る定めの、死んだ振り子を [90]
271　——手押し車に繋がれた、人夫の
272　賤しいハーネスを、サスペンダーと [91]
273　——ふしだらな女の家にある、レースのついた心地よい枕を、
274　まだ穴を開けられていない、裾飾りも楽しげな針刺しと [92]
275　——くたびれたフェンシングの選手が、

276 ほかと離して置いたマスクを、原石を割る人が、メガネにつける
277 眼窩保護帯と [93]——さる老人の、皺がくっきりと刻まれた
278 こめかみを、握った手の甲の上部と [94]
279 ——ピントを合わせている人の髪を乱す黒い布と、
280 風を起こしながら四人がかりで棺に被せている
281 それを [95]——開くためには、ひとつか二つの留め金を打ち負かさねばならぬかもしれないが、
282 人びとのアルバムを、祈祷書と [96]
283 ——安っぽいコルク抜きと、腕のない人の五指を補う、
284 ほぼ自身のといっていい、貴い身の上の鉤を [97]
285 ——片腕を突っこむ吊り包帯を、炎症が起こった日、Z25
286 十倍に腫れあがった頬が蟄居したそれと [98]
287 ——暖炉を煽るものと、熱い鉄を
288 撓む頃合いにするときの、鍛冶屋のふいごを [99]
289 ——咳をしている人が、喉のため、医者に見せるものと、
290 鍾乳石がぽつりとついた、落日に赤く染まる
291 洞窟の半弧を [100]——怪しい界隈に忽然と現われた血の海を、
292 肺結核菌患者が吐いた、油断のならない
293 痰と [101]——馬具屋で、空っぽの鐙が
294 煌めいている留め具を、黄色のパラソルの
295 ダメになった紐と [102]——ジビエを食した者が、罵りながら、
296 脇のほう、遥か彼方に吐き出す、見かけよりも危険な種と、
297 空を切り裂く砲弾を [103]——手の施しようのない
298 大水が襲いかかるとき、射撃の標的を、
299「二の目」のドミノ牌と [104]——その旅立ちを見守られながら、Z26
300 手を放すと飛んでいく栓と、筒状の
301 エレヴェーターを [105]——北を指す、か細い針と、
302 水に浮き、池を二つに分けている、留守にされた
303 糸を [106]——影絵と、危険な持ち場で
304 発砲している歩哨の、白い背景に浮かぶその
305 黒いシルエットを [107]——ロープをぴんと
306 伸ばし、獲物めがけて一直線に飛ぶ、陰険な一組のボーラを、
307 バーベルと [108]——フェンシングの選手がぐっと前に踏みこんだとき、
308 鉈鎌と、誇らしげに撓るフルーレを [109]
309 ——上手に投げられた円盤を悪巧みもなく飲みこむ
310 トノーの口と、カラスのチーズが落ちる
311 それを [110]——変わり者が、宛先を机に向けて置いたとき、
312 証券が入った非の打ちどころのない封筒を、
313 赤の五と [111]——牡蠣を容赦なく
314 口まで運ぶ三叉槍と、外の穀物倉庫で
315 干し草を持ちあげるそれを [112]——雲の描かれた乾いた幕が、

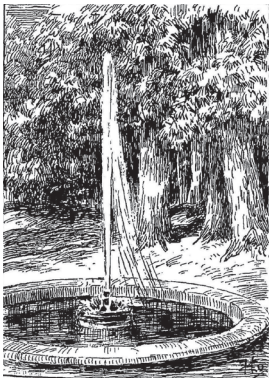
316　壁で隔たれている二枚の背景画の前に垂れたとき、その幕を、
317　細い鼻までさがったヴェールと[113]――抜き身で
318　交差するとき、その開ききった鋏と、
319　刀身だけの二本の剃刀を[114]――緑の鎧戸が閉じられているとき、
320　坂の通り沿いにある白い家並みを、
321　ロックフォールと[115]――一本のホースが蛇行している
322　湾曲した芝地を、長い髪の毛が一本這いのぼっている、
323　不死なる者の肩と[116]――鍵の重厚な番号札がさがる
324　ホテルの廊下と、ポールに吊られた看板でいっぱいの、
325　華やかな大通りを[117]――盲者のふりをしてズルに興奮している、
326　目隠し鬼で紐を巻かれた子どもと、
327　休戦交渉のために派遣される使節を[118]――聖父の帽子と、Z27
328　人夫が元気に市場を行き来しているとき、
329　頭を守っている白いそれを[119]――明るい緑の服を着た
330　乳母の、豊かで黄褐色をした片方の乳房を、
331　容れ物を裂いて顔を出す栗と[120]――不意に
332　ひっくり返るときの赤い傘と、溢れそうな
333　杯を[121]――トノーで、ついている人が
334　辛い仕事をさせる輪と、冷たい水に浸かる、
335　労苦を厭わぬ水車のそれを[122]――席が五つの
336　避難場所である、満杯の傘立てで飾られた白いボードを、
337　歌が入るうぶな紙と[123]――歯医者に、
338　歯の化け物じみた姿を供する鏡のひとつと、
339　ひげ剃り用の凹面鏡を[124]――二本の人差し指に
340　身を委ねた口がつくる笛と、輪を飛ばす前の
341　グラースを[125]――鶏の吉日に、笑うため
342　二つに裂く、脂ぎった枝のついた骨と、
343　埃をかぶった拍車を[126]――さっと飛ぶ二粒の涙と、
344　育ちの悪い輩が流感に罹り、指のなかで
345　鼻をかんで排出するものを[127]――そよ風も吹かぬ日に、
346　インクを注いでいる空のインク瓶と、
347　アスファルトでいっぱいにしている桶を[128]――船から合図を送るとき、
348　赤いものを備えた腕を、なかなか消えない
349　マッチと[129]――栓を入れ直す前に、そこに
350　見える文字と、鋸で輪切りされた材木に
351　刻まれているそれを[130]――気どった態度で、女性が無造作に肘だけで
352　壁に凭れかかるとき、その裸の腕を、
353　なにかを弾こうとしている人差し指と[131]――母親が大胆に
354　揺りかごを開くとき、その白いカーテンを、ひき離された、
355　切られていない二葉と[132]――これからジグザグに伸びようかという、Z28

番の金具がついていない、折り畳み式の黄色いメートル尺を、
靴に結ばれた夏色の紐と[133]——もっと鳴らそうとして
子どもが往復させるとき、音が出る輪を、
腕時計の心臓と[134]——正面階段の真ん中にある、
絨毯押さえ棒を、空にされている大箱の、
銅製の蝶番と[135]——なんとおっしゃいましたか
のあとに適した仕草と、前を歩く黒い狆が
飼い主に見せるものを[136]——殻のついた卵から
中身をとり出す際、匙で除けるものと、
教皇のカロッタを[137]——雪に覆われたあばら屋の
美しい屋根を、背を上にして置かれ、真新しい学習帳の紙を被せられた　Z29
小難しい本と[138]——馬が緑地で立派に
用を足すとき、その賜物を、ビリヤード台の
真ん中にある数個の的玉と[139]——通り際に、卵が
雌鶏からごっそり持っていくものと、白いストッキングに覆われた
ふくらはぎについた飛び散りを[140]——水を抜いた池から出てきた、
おどろおどろしい骸骨を、手羽をしゃぶった人が
皿に残した部分と[141]——パン屑で離された二本の歯と、
親指を暇にしてクルトンを拾う、手袋をした
召使いの二本の白い指を[142]——二人の黒人が
仲よく散歩をしているとき、鉤型をした彼らの腕を、ヘマをして絡まった
二本の釣針と[143]——仕立屋が、それにうっとりしながら、
足で動かしてすばやく行き来させる針と、
蒸気ハンマーを[144]——燕尾服を着る日、きめこまやかな人が
座るときに広げる裾を、頬の両側で
止まっている偽髭と[145]——鉄の
囲いを背にした犬の住処と、
柵のついた哨舎を[146]——火鋏につままれた、
地獄の業火が猛る燃えさしを、宝石細工師の
それが見せびらかすルビーと[147]——代書人が使う革の円座クッションを、
菓子屋の小僧が光輪に見立てて持つそれと[148]
——役人が入ってくるとき、だぶだぶのズボンから
出ている裏返されたポケットと、馬の鼻先に向ける、
平たい餌袋を[149]——ダイスカップに入る間際の二つのサイコロと、
つままれて、空のコップを協力して甘くする
二つの白い立方体を[150]——立派な家に取りつける
番号と、看板用のどでかい、
不純なそれを[151]——新しい行が、
その秘密を吸取紙に教えこむローラーと、
公園のそれを[152]——事情を知りたがっている耳に

396 狙いを定めた多弁な小指と、鼻の穴が自身に引き寄せる
397 まっすぐな人差し指を[153]――控えめに助けを申し出る
398 罫線入りの下敷きを、ブラウスの縞の　Z30
399 見本と[154]――信じやすい人が怖くなり、
400 器用に角をつくるとき、その手を、うろついている
401 蝸牛の、なにかに注意を向けている頭と[155]、高級な白い手袋を
402 はめている、表現力豊かな同じ手と、ロバ帽子を[156]
403 ――眼科の診断室が開かれたとき、文字が
404 幾重にも列をなしている、壁に貼られたシートを、
405 ABC が書かれた紙と[157]――ズルをするビショップと、
406 ルークの滑りを選んだときの
407 クイーンを[158]――霊柩車の中央にある、菫でできた
408 十字を、黒い宝石箱の、アメジストの
409 破片でできている十字と[159]――貨車の吊り布を、Z31
410 古いステッキの、半ズボンを履かせた先っぽと[160]
411 ――食卓で、おどけた酔っぱらいが、友だちの
412 口に何度も投げつける肉だんごと、玉入れにドスンと
413 ぶつかる球を[161]――ルールドの、松葉杖がいくつも立てかけてある壁を、
414 ちっちゃな子が、大文字の A を一心に書き連ねたページを
415 逆さにしたものと[162]――畳んでいないナプキンが
416 それに触れるとき、食欲がなくて残したパンの端を、
417 白い飾り紐がついた手袋の、指の一本と[163]――洗面台の
418 明るいコーナーの中央に置き忘れた結婚指輪を、
419 しゃれた封書の金の O と[164]――お痛をなくそうとしている
420 絆創膏を丸めたものと、丸まった、
421 ピンクのサテンの端切れを[165]――気球を、吹きつける
422 ための、網が掛かった莢の一種と[166]
423 ――靴下から抜きとるときの、卵型の木型を、
424 山羊が身軽になるのを、時間をかけて、終わらせる
425 ものと[167]――災難に遭い、口がきけない
426 ミテーヌの端くれと、牧神の笛を[168]
427 ――夜食をとったあと、腹ばいになって寝ている酔っぱらいの鼓膜に意地悪し、
428 その白いチョッキからずり落ちる大きな金の懐中時計と、寝床からひっぱり出される
429 失語症の湯たんぽを[169]――青空に逃れ、
430 天辺に達したときの子どもの風船を、
431 役人の赤いインクの染みと[170]――雑巾で
432 きれいにしている黒板を、顔を拭いてハンカチを
433 べたべたにしている黒人の広い額と[171]。動きも軽やかな
434 鉛筆の芯と、曇った窓ガラスを名前で装飾する、
435 彼の湿った指を[172]。横にして、「いいや」と言うのに

436 役だつ同じそれを、コンパスのゆらゆらしている
437 黒い先端と[173]——かの星が猛威をふるうとき、
438 帽子の垂れと、日光を和らげて影をもたらす、平らな
439 天井をしたテントの壁を[174]——壮齢のブロンドの白髪
440 一本と、ハバナ葉巻の山に彩りを添えているタバコを[175]
441 ——痩せている人の、細い指には緩すぎる二つの
442 リングと、両腕をくぐらせたサーカスのそれを[176]
443 ——測量技師がおらず、休暇中のコンパスがそこに
444 横たわったまま放っておかれている紙を、死んだ四角い
445 腕時計と[177]——使ったあとのカンピロメートルと、Z32
446 道のりが長いとたまげることになる、歩く速さで進む手押し車の、
447 先の部分を[178]——縄編みと、賢い馬の
448 尻が弧を描いたとき、
449 動かさないでいるその前足を[179]——鬱陶しい天気のときに
450 V を伸ばす、よき忠言者たる針を、
451 一本の枝毛の先と[180]——靴下の穴から
452 見える二本の足の指と、痛んだズボンの尻が
453 囲っているものを[181]——大盛りのポテト
454 サラダと、人がおしゃべりしながら、ぞんざいな指さばきでチェッカーボードに山と
455 積む白の駒を[182]——端を、
456 折った名刺から落ちた最初の薄紙と、
457 灰色をした、滑らかなガラスタイルを[183]——鋲
458 付きの靴底が糞につけた印と、
459 ビー玉なしのソリティアを[184]——ショーウィンドーの
460 なかにある、なにも締めつけていないときの、聖なる白き腕章を、
461 夜会でつける、感じのいい、できあいのネクタイの結び目と[185]——唇の下の鬚が
462 アーチを設えるならば、黒く、まるで覇気のない口髭を、
463 フェルマータ記号と[186]——庭園が雨で輝くとき、
464 割れた土壺の無傷の底を、穴の
465 空いた黄色いスパンコールと[187]——皿から飛び出るサヤインゲンと、
466 黄昏どきに落ちるとき、ブラインドカーテンの Z33
467 細長い板を[188]、そして後には、山積みの黄色い
468 封書を、お店の多い場所で、調理人が
469 膨らまし損ねたジャガイモと[189]——天井からぶらさがり、糸の
470 先で揺れている陽気な紙の雪だるまと、
471 雪のあとで吊るし首になった者たちを[190]——儀礼の
472 キスの産物である、白い手袋の湿った輪を、水を切った
473 ストローがつける印と[191]——どこぞの君主がガラガラの
474 代わりにする手と、美女の右手をもとに、大理石で
475 作られたそれを[192]——進歩に夢中な、

476 三つ揃いのスーツを着こんでいる赤肌と、麻疹に罹ったガキを [193]
477 ――その擦り傷からして、えり抜きの、
478 よく滑る凍った溝と、艦艇を進水させる
479 道を [194]――煙草を吸う、貧血でベッドにいる人の
480 赤味のない口と、蠟燭を持った握りこぶしを [195]
481 ――恥知らずが二度突きするとき、赤でない球を、
482 緑の綬からつまみ取られる、
483 色褪せた金のピンがついた丸い真珠と [196]――灰色の犬の、
484 艶のある突起物を、メトロノームの音がするアンテナと [197]
485 ――石工が私たちを名づけている屋内の四角い板と、
486 表書きがされ、両側が布地で硬く
487 なっている封筒を [198]――コンサートで、これから打たれることに
488 道理もなく怒っているバチを、腕鎮の温厚な
489 先っぽと [199]――ありふれた鉛筆キャップの円のある
490 裂け目と、重いボタンの空っぽの避難所を [200]
491 ――温めようと、かじかんだ足の親指をぶつけている二つの木靴と、Z34
492 お彼岸の頃、正面衝突して跳びあがる、錨を下ろしていた
493 二艘の船を [201]――ボクシングの試合がない日、
494 飛んでいく革のボールと、手袋をした攻撃的な
495 拳を [202]――運のいいスペードの十が切り札を
496 決めるためにひっくり返され、注目を集めたばかりの端正な山札を、
497 五のダブル牌と [203]――体中を探索する
498 毛抜き鋏に滞留している灰色の
499 毛と、雄々しい万力の思い通りになっている針金を [204]
500 ――頭をぶつけてしまうほどみすぼらしいシャペルと、
501 ケルンの中央に座す巨大なカテドラルを [205]
502 ――突如現われる、北極生まれの氷山を、
503 コップのために細かく砕かれた、持ち運べ、
504 職務に縛られている、幅狭の氷塊と [206]
505 ――ヘアネットのなかの虱と、漁師の家で、
506 トロール網をぶらぶらと探索しているクモを [207])))



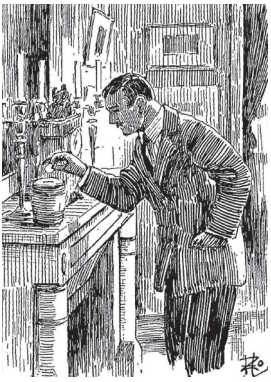
Z18　公園にある噴水、人物なし。

Z19　夜、点灯されたカンテラを携えている男。

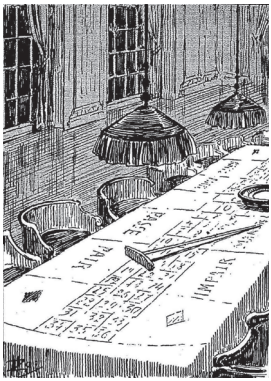
Z20　砂漠にある革袋。裏切り者の剣によって意図して開けられたと思しき穴から水が漏れている。人物なし。

Z21　別の男に名刺を差し出している男。威嚇的で、決闘になるのではないかと思わせる態度で。

Z22　演奏中のヴァイオリニスト。弱音器をつけている。



Z23　樽形の貯金箱に硬貨を入れている男。

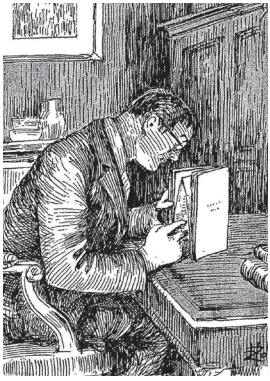


Z24　ディーラーのチップ集め棒が置かれている遊戯台。人物なし。

Z25　腕を包帯で吊っている男――とても大きな包帯。

Z26　ドミノをしている二人。一方の指には二の目のドミノ牌があり、置こうとしている。

Z27　目隠しをされた使節（士官）。彼とは異なる軍服を着た二人の兵士に連行されている。ほかに人物なし。



Z28　テーブルに向かって座っている男。机上には本が立たせてあり、切られていない二葉を広げ、そこにある一節を読んでいる。

Z29　雪に埋もれた小さな家。屋根は、背を天に向けて広げた本のような形をしている。人物なし。

Z30　横から見た男。事務机に向かって座り（左の横顔）、罫線入りの下敷きを手にして、それを紙の下に差し入れようとしている。

Z31　客車の隅に座っている女、腕を手摺りに通している。

Z32　地図にカンピロメートルを当てている男。

Z33　窓のブラインドを閉めている最中の女。ブラインドはすでに半分閉じられており、板はほとんど水平になっている。

Z34　雪景色のなかにいる、木靴を履いた二人の男。足を温めるために靴底をぶつけている。